

神秘学ポエジー 風遊戯
mediopos
145

【神秘学ポエジー～風遊戯 第 295集】 media-poesieヴァージョン

mediopos 3601-3625

2024.9.28～2024.10.22

神秘学遊戯団

松田行正『和力（わぢから）』（2008）は
日本文化を象徴する以下の24のテーマ（かたち）を
漢字一文字に集約させ象徴的に読み解く
発想の缶詰のような一冊

- 籠(ろっかく)・×(バツ)・似(にている)・方(ほう)
- 律(リズム)・字(かな)・
蔓(からくさ)・紙(かみ)
- 余(よはく)・包(つつむ)・
月(つき)・波(なみ)
- 旋(らせん)・結(むすぶ)・丸(まる)・格(こうし)
- 起(てりむくり)・朱(あか)・軸(アシンメトリー)
- 鱗(さんかく)・象(ミニチュア)・
素(しろ)
- 比(ひ)・縞(ストライプ)

今回はそのなかから「素(しろ)」をとりあげる

白川静によれば「素」とは
「しろぎぬ、しろ、もと、もとより」を意味し
「本来の性質、もとの状態、何も加えない」といった
意味としても使われる漢字

さらに「白」は
白骨化した頭蓋骨の形（しゃれこうべ）から
「しろ、しろい」の意味をもち
優れた首長の頭骨には優れた呪霊（霊の力）がある
そう信じられていた

「素」を本書で「しろ」と読ませているのは
おそらく「白」がほんらいもっている
霊的ともいえる力としてその色をとらえているからだろう

さて
日本では葬式に黒服を着るが
明治時代以前では白装束だった

黒服に変わっていったのは
伊藤博文が朝鮮で暗殺されたときの国葬で
欧化政策を推し進める明治政府が
欧米風に黒にするようにしたときからで
それ以降徐々に黒服が中心になっていった

ほんらい日本では「白」は禁忌の色で
鎮魂の儀式としておこなわれる
婚姻や葬式のような
ハレ（晴れ＝行事）において使われる色

葬式のときは白装束が基本であり
葬式後にじぶんに振りかける塩も白
相撲で土俵に撒く塩も白
花嫁が婚礼に着る衣裳も「白装束（死装束）」

その白は
日常と非日常の区切りをつけるための白であり
またハレにおいては
祖霊がそこで悪さをするをやりすごすために
ふだんとは違う白い服に変装する
という祖霊信仰も背景にあった

白という色は
光の三原色が重なった色だが
絵具などの物質的な色の三原色を重ねると黒になる

明治時代以降において葬式が白装束から黒服に変わり
それがいまではすっかり浸透しているのは
「欧化政策」がきっかけではあるだろうが
それは霊的な感受が失われ
物質的なそれになんか変わってきたということを
象徴的にあらわしているといえるのかもしれない

「白」という漢字は
「ドクロのなかからっぽであることを
横棒（もとは点）で表している」というが
ほんらいそのからっぽな空間は
「神威が籠もるべき空間」だったようだ

古代のシャーマン（巫者・呪者）は腰に
「鐸」といわれるなかが空洞の風鈴を提げていて
〈なにものか（神）〉がきたことを聴いていたのだが
その力が衰えてしまって風鈴のなかにベラ（舌）を入れ
その音を増幅させようとした

また日本において「しろ」という言葉が
白色の意味で使われるようになったのは
十世紀中ごろ以降のことらしく
「それまでの「しろ」には、「くろ」に付随した色、
黒の領域からはずれた色というニュアンスがあり、
「あお」までもが含まれ」

「恐怖や寂しさをもたらす薄暗さ」として
「神との関係、信仰の対象として見」ていたようだ



■松田行正「素（しろ）」
（松田行正『和力（わぢから） 日本を象る』NTT出版 2008/3）

「素（しろ）」は「白」の「しろ」を、
「地」ではなく「図」と見る見方」で
「何もないデッドスペースではなく
意味ありげで存在感のある空間」として
そこに「〈なにものか〉の存在」を
感じ取っていたことからきていると考えられる

「素（しろ）」は「白」の「しろ」を、
「地」ではなく「図」と見る見方」で
「何もないデッドスペースではなく
意味ありげで存在感のある空間」として
そこに「〈なにものか〉の存在」を
感じ取っていたことからきていると考えられる

「素（しろ）」は「白」の「しろ」を、
「地」ではなく「図」と見る見方」で
「何もないデッドスペースではなく
意味ありげで存在感のある空間」として
そこに「〈なにものか〉の存在」を
感じ取っていたことからきていると考えられる

「素（しろ）」は「白」の「しろ」を、
「地」ではなく「図」と見る見方」で
「何もないデッドスペースではなく
意味ありげで存在感のある空間」として
そこに「〈なにものか〉の存在」を
感じ取っていたことからきていると考えられる

「素（しろ）」は「白」の「しろ」を、
「地」ではなく「図」と見る見方」で
「何もないデッドスペースではなく
意味ありげで存在感のある空間」として
そこに「〈なにものか〉の存在」を
感じ取っていたことからきていると考えられる

「素（しろ）」は「白」の「しろ」を、
「地」ではなく「図」と見る見方」で
「何もないデッドスペースではなく
意味ありげで存在感のある空間」として
そこに「〈なにものか〉の存在」を
感じ取っていたことからきていると考えられる

「素（しろ）」は「白」の「しろ」を、
「地」ではなく「図」と見る見方」で
「何もないデッドスペースではなく
意味ありげで存在感のある空間」として
そこに「〈なにものか〉の存在」を
感じ取っていたことからきていると考えられる

「素（しろ）」は「白」の「しろ」を、
「地」ではなく「図」と見る見方」で
「何もないデッドスペースではなく
意味ありげで存在感のある空間」として
そこに「〈なにものか〉の存在」を
感じ取っていたことからきていると考えられる

「素（しろ）」は「白」の「しろ」を、
「地」ではなく「図」と見る見方」で
「何もないデッドスペースではなく
意味ありげで存在感のある空間」として
そこに「〈なにものか〉の存在」を
感じ取っていたことからきていると考えられる

「素（しろ）」は「白」の「しろ」を、
「地」ではなく「図」と見る見方」で
「何もないデッドスペースではなく
意味ありげで存在感のある空間」として
そこに「〈なにものか〉の存在」を
感じ取っていたことからきていると考えられる

「腹をくくる」「腹を割って話す」「腑に落ちる」「太っ腹」あるいは「腹が立つ」「腹の虫が治まらない」「腹黒い」など脳と腸を結びつけるともいえる言葉があるが

現在では腸は「第二の脳」といわれるようになってきているように脳と腸は相互に情報やりとりをしながら影響を及ぼしあい身心の状態を調節していることがわかっている

そのしくみは「脳腸相関」と呼ばれ（腸から脳へ情報を伝えるしくみは腸脳相関）それが分子および細胞レベルで明らかになってきているのである

「脳腸相関の要となる腸内環境の乱れは、便秘や下痢といった腸疾患だけでなく、糖尿病や肥満、そしてアルツハイマー型認知症などさまざまな病気の原因となる、こうした病気を悪化させること」が明らかになってきたため現在世界中の研究者たちが注目しているのだという

坪井貴司『「腸と脳」の科学』ではそうした腸と脳が相関するメカニズムが以下のような構成のもとに解説されている

第1部は脳腸相関で重要な働きを担っている「腸内マイクロバイオータ」と呼ばれる腸の中に存在するミクロな生き物たちについて

第2部は腸と睡眠・記憶・精神疾患・神経疾患や発達障害食欲と肥満との関係に関する最近の研究について

第3部は著者の専門分野である生理学・神経科学の最新研究で明らかになってきたことや腸が脳以外の臓器とのやりとりを行っていることについて

比較的理解しやすいところについては各章ごとに付されている「まとめ」を引用部分で紹介しているが

これとは別に本書では「プロローグ」として「腸と脳」Q&A（1～13）がトピックとして置かれているその内容から参考になりそうなところをかいつまんでとりあげておくことにしたい

■坪井貴司『「腸と脳」の科学／脳と体を整える、腸の知られざるはたらき』（ブルーバックス B 2273 講談社 2024/9）

Q1：腸内環境は、人によって違うのか？
→国籍や年齢・個人によってその組成が違う

Q2：睡眠と腸の関係
→睡眠の質にマイクロバイオータの組成が重要

Q3：腸内環境と記憶力
→ビフィズス菌の摂取により認知機能の改善や脳の萎縮の進行が抑えられる

Q4：認知症以外の腸内環境が関係している脳の疾患
→筋萎縮性硬化症（ALS）や多発性硬化症

Q5：ストレスと腸
→腸内マイクロバイオータの組成が変化すると行動に影響を及ぼす可能性がある

Q6：腸は第二の腸といわれるのはなぜ？
→生命機能の維持に欠かせない働きがある

Q7：発達障害と脳腸相関
→腸内マイクロバイオータの組成の変化によって脳内で使われる遺伝子が変化し自閉スペクトラム様症状が引き起こされる

Q8：うつ病と腸内環境の関係
→ビフィドバクテリウム属・ラクトバチルス属その2種類の細菌が減ることとうつ病のリスクが高まる

Q9：感染症と腸の関係
→腸管バリア機能が正常に機能しているかどうか感染症の重症化に関わっている可能性がある

Q10：腸内環境と肥満
→高脂肪で食物繊維の少ない食生活で腸内マイクロバイオータの組成が変化しその結果として肥満化する可能性が高まる

Q11：腸内環境を整える食べ物
→ビフィズス菌などの多くは胃酸で死んでしまうので食物繊維の摂取が有効

Q12：腸内環境にとってよくない食べ物は？
→カロリーのない人工甘味料やさまざまな疾患で服用される治療薬

Q13：腸と脳以外の臓器とのつながり
→腸肺相関・腸肝相関・腸腎相関・腸筋相関



岩野卓司の『贈与論』
およびそれに関連した「ケア」の考え方については

mediopos-1776 (2019.9.26)
岩野卓司『贈与論／資本主義を突き抜けるための哲学』
mediopos3479 (2024.5.27)
岩野卓司「ケアの贈与論」
連載第1回・第2回 (法政大学出版局 別館(note))

mediopos3546(2024.8.2)
岩野卓司「ケアの贈与論」
連載第3回・第4回・第5回 (同上)
さらにmediopos3576(2024.9.3)で
『未来哲学』第八号 (二〇二四年前期) 掲載の
「ケアにおける贈与」をとりあげているが

今回は「ケアの贈与論」第6回・第7回から

第6回では最首悟の話から
「共生」や「共同性」の基盤となる
「頼り頼られる」関係について考察されている

最首悟は相模原障がい者施設殺傷事件の犯人と
往復書簡をかわしたことで知られているが

そのきっかけは
「障がい者は生きる権利がないという思想のもとで
45人を殺傷した犯人」が
最首氏にダウン症で重度の知的障がいをもつ
娘がいることを知った」こと

最首氏は障がいの視点から「共生」の問題を考え
「健常者どうしの関係を前提にするのではなく、
障がい者との関係も考慮に入れて
「共生」を考えるべきだと主張し

「人に対して何かをする喜びを手掛かりとして」
この「共同性」について考えを深め
「自発的に何か他人のためにする」「喜び」が
人間関係の根底にあることを見出し
その感情を「内発的義務」ととらえている

その「義務」は
「思わず人を助けてしまうような体験」のような
「義務以前の義務」である

そうした「内発的義務」は
とりわけ災害などの危機のときには
「根源的な共同性」としてあらわれるが
平時においては失われてしまいがちであることから

最首氏はケアを踏まえた共生を
障がい者との関係から
自立した個の理性的な関係ではなく
「頼り頼られる」関係としてとらえている

それは「頼られることが同時に頼ることでもあるから、
贈与することが同時に受け取ることでもある」

そうした「贈与による共同性」に岩野卓司は
「贈与と返礼からなる贈与交換よりも根本的なもの」を
見出している

続く第7回では
ケアの肯定と否定の側面が
「ケアの両面性」が考察されている

ケアをする人は
「ケアをすることで喜びを得る」が
「ケアの贈与に喜びだけを見ていく」ことはできない
「ケアする方にも不安、つらさ、負担など」の現実があり
その側面を見なければ「ケアの本質を見落としてしまう」

立岩真也は『弱くある自由へ』で
ケアには肯定的側面だけではなく否定的側面があるという

「ケアの肯定感のみを強調するとすれば、
それはケアの本質を見誤ることになる」
そしてその両面性は簡単に解消できるものではない

ケアの肯定的な面について第6回でふれた最首氏は
その否定的な面として「排泄」を挙げている

「排泄はケアの否定的な面のほんの一部かもしれないが、
それを考えるための端緒になりうる例だ」という

「ケアに慣れてくると、この「臭い」「汚い」にも慣れてくる。
しかし、「嫌だと思えることが薄れているのは危険ではないか」と

現代の日本は抗菌・除菌・殺菌など
「清潔であることを暗黙のうちに強いられる社会」である

そのような「無菌化に向かっている世の中で、
ケアは他人の糞尿と接する機会を強いる」

最首悟が往復書簡を交わした
相模原障がい者施設殺傷事件の犯人・植松聖死刑囚は
優生思想の持ち主であり
「生産能力もなく役にもたたず、糞尿や涎を垂らして
周りに迷惑をかける障がい者は生きる資格はなく
抹殺されるべきだと考え、それを実行に移した」



介護士の三好春樹は最首氏との対談のなかで
「植松の行動の背景のひとつに
現代の無菌化した日本社会があるのではないか」と示唆している

フロイトは「不気味なもの」という論文で
「僕らが不気味に感じるものはかつて馴染みであったものだ」
「薄気味悪いドッペルゲンガー現象も
とどのつまりは自分の分身」だと論じているが

排泄物や分泌物ももとは自分の体のなかにあったもの
それが「外に排泄されたとたん異臭を放ち、遠ざけられてしまう」
「無菌社会はそれを徹底し助長する」・・・

岩野卓司はそうした視点から
「ケアの贈与の両面性は、二重のものであり、反転可能」であり
「無菌社会が強いるケアの不快さは、
分身としての排泄物・分泌物との共存というかたちで
快にもなりうる」のではないかと示唆を加えている

ケアの贈与の両面性は重要な視点である

私たちのだれもが多かれ少なかれ
じぶんの内なる「影（シャドー）」を
じぶんの外に投影して生きているからである

そしてその投影された「影（シャドー）」を
不快に感じたり敵対したりもする

その両面性を「共存」というかたちで
いかに意識化し得るかが課題となる

「日本語を書記するために、
漢字、ひらがな、カタカナの三種の文字があるのではない。
三種の文字とともにある言葉が日本語をつくっている」

このもっとも基本的な日本語理解に基づきながら
石川九楊『ひらがなの世界』は書かれている

『万葉集』はすべて漢字（万葉仮名）で書かれた歌であり
その万葉仮名から平安時代中期九〇〇年頃
「ひらがな＝女手」は生まれ

九〇五年に編纂された『古今和歌集』は
その新生のひらがなで書かれた

『万葉集』の歌は
もともとあった歌謡を表記したものとは言い難く
「声と文字のあいだには千里の径庭がある」

当時使うことのできる文字は漢字だけだったので
表記する方法は
漢字を表音文字として宛字のように記述する方法と
漢字の意味から字を宛てる方法のふたつ

まずは漢詩をモデルにして
漢字＝漢語の意味を使った表現方法を採用したが
その後漢字を表音文字へとつくりあげていくなかで
「ひらがな」はうまれていった

「なくもがなの漢字の意味の侵入をなんとか払拭したい。
漢字の意味を完全に払拭するためには
漢字でない文字にならなくてはならない。
その強い指向が高まって、やがて、
漢字を使った仮字＝万葉仮名（漢字）は
女手（ひらがな）へと一大変身をとげることになった」のである

いうまでもなくそうした表記は
現在でも日本語は
漢字語とひらがな語の二重性をもっているように
「漢字語の意や音に依る極と、漢字語から遠ざかって、
ひらがな語の音のみに依ろうとする極とに引き裂かれ」ながら
成立していった

- 石川九楊『ひらがなの世界——文字が生む美意識』
（岩波新書 新赤版 2017 2024/5）
- 石川九楊「ひらがな語のスタイル
——『ひらがなの世界』あとがきのあと」（『図書』2024年9月号）
（web岩波「たねをまく」り）



さて一字が一語である漢字とは異なり
「女手やひらがなの本質は、
「上下の文字がつながり、そのことではじめてひとつの言葉、
すなわち文字になる」 ことにある」が

漢字の一字一語単位の様式とその力の影響から
「女手は、単語の単位や音節単位の書法の確立を目指しつつも、
最終的にはその書法成立には行き着かず、
中間的な姿を許容するようになった」

連続することなしに単語となることができないひらがなは
「前後の文字の筆画が結合することによって掛筆を生む。
その筆画の「あるけれどもない。ないけれどもある」
二重性の美学はさらに掛字、そして掛詞などの
表現技法に結びついて」いくことになった

ちなみに『枕草子』の冒頭文「春はあけぼの」の例が
挙げられているように
原本のそれは
「ずらずらと棒状の、句点も読点もなく書かれている」が
現在書籍で表記されているものは
それぞれの出版社の解釈にもとづいて表記されている

それは正しくないともいえるのだが
解釈としては正しいともいえる
古典的なひらがな表記を
現代における表記法で表すむずかしさがそこにはある

重要なのは
「濁音語や濁音文が隠れるだけではなく、
連合し、連続しなければ文字（語）たりえない
ひらがな（単位文字）の連続と非連続が不可避に生む、
複雑で多岐、多彩に広大な表現が重層的に展開する」
そんな二重化、多重化して広がっていく姿の豊かさだろう

日本語を学び始めた外国の人たちが
まずはじめに当惑するのは
日本語に漢字・ひらがな・かたかなという
三種類の文字による表記があることだというのが

三種類の文字表記が一体となっている文字を
使い分けることのできるることによって
培われてゆく知力と感性
そのなかでも「ひらがな」という表記法が育んできた
美意識は得がたいものだといえる

長谷川權『俳句の誕生』については
mediopos-2373（2021.5.16）及び
mediopos3521（2024.7.8）でとりあげたが

その際には主に
子規～虚子の俳句における「写生」について
そして大衆化によって内部崩壊し
「批評」が喪失してしまっている現状
それは俳句だけではなく
あらゆる文化に及んでいることについてふれた

今回はその観点からではなく
俳句という表現形式の成立における禅の思想の影響
そしてそのシュルレアリスムとの関係について
mediopos-1085（2017.11.4）
大岡信『現代詩人論／詩人の設計図』もあわせてとりあげる

詩歌をつくるとき
言葉以前の世界において主体の転換が起こる
長谷川權はそれを「空白の時空」と呼んでいる

日常的な言葉の世界にあるとき
その代償として私たちは言葉以前の世界を失っている
「言葉で言葉以前の世界はとらえられない」のである
しかし俳句や短歌を含む詩歌には
言葉以前の世界をとらえる方法が求められる

日本の和歌の原点は『古今集』だが
『新古今集』までには三百年が必要とされた
『古今集』から『新古今集』へ
和歌を変えた最大の要因は禅である

禅は言葉では悟れないと考えた
「宇宙の真の姿は人類の誕生後、
言葉によって覆い隠された言葉以前の世界、
つまり言葉のヴェールの向こうにある」

「しかし人間の住む世界はいまや言葉でできている。
そこで宇宙の真理を覆い隠す言葉のヴェールを剥ぐには
言葉を使うしかない」

ゆえに「言葉はその論理的な脈絡を断たれて
短い断片になるしかない」
そして「禅問答」が生まれた

「禅問答とは言葉の限界を言葉によって知らせ、修行者を
宇宙の真理に直面させるための言葉の仕掛け」である

言葉以前の世界は現前しているが
わたしたちはそれに気づけないでいる
そこで禅問答によって
「その言葉のヴェールに切れ目を入れて、
言葉以前の世界に目覚めさせ、悟らせる」のである

「和歌の王道をゆく『古今集』の歌は
禅の思想を受容することによって言葉を切り結び、
新古今的語法の歌に生まれ変わった」

禅の言葉を真似るように
和歌の詩型は短くなり問答性を高め
俳諧の連歌となり
さらにその発句が独立することで俳句が生まれた

第一次大戦後のヨーロッパで起こったシュルレアリスムは
「言葉では真理に到達できないが、言葉しかない、
という禅の思想」と共通したところがある

詩人の大岡信はシュルレアリスムの優れた理解者だったが
みずからシュルレアリストと自称することではなく
その陥穽についても自覚的だったのは
「禅が生み出した新古今的話法、
そこから誕生した連句の存在をすでに知っていたから」だ
と長谷川權は示唆を加えている

話をもとに戻すと
私たちは言葉を使うことで
言葉以前の世界からヴェールで隔てられている



- 長谷川權『俳句の誕生』（筑摩書房 2018.3）
- 大岡信『現代詩人論／詩人の設計図』（講談社文芸文庫 2017.6）

詩歌にふれるということは
その言葉以前の世界に
言葉でふれるということでもある

詩的言語という問題もそのことに関連している
言葉以前の世界は固定された主体の世界ではない
そこでは「空白の時空」としての
主体の転換がもとめられる

言葉によって
言葉によって失われた世界に入らねばならない
まさに禅問答としてのポエジーである

ミヒャエル・エンデが亡くなって
ずいぶん経っていることを不意に思いだした

あらためて確認してみると
亡くなったのは一九九五年八月のこと
三〇年近く前になる

当時よりもさらに
ずいぶん陰惨な時代となっている世界を
エンデはいまどんなふうに見ているのだろう
そんなことを考える

ふと気になって
いまでもときおり読み返す
『エンデのメモ箱』の出版事情を調べてみると
（最初に単行本・続いて全集・そして文庫）
いまでは古書でしか手に入らないようだ

せっかくなのでそのなかから
いまでも変わらず示唆を与えてくれる
比較的短いアフォリズム的なメモのいくつかを
掲載されている順にとりあげておくことにしたい
（理解しにくい場合はそれぞれの引用部分を参照のこと）

「クエスト」
ミノタウロスとテセウスの迷宮の話
「人はだれも自分が探すものに変身する」

「単純」
真実は単純だというのは正しいが
簡単にはわからない
「これほどむずかしいことはない。」

「創造力」
科学は人間の創造力には手が届かない
「人間が自由なのは、みずからのなかから
創造的になにかを生み出し、
そうして自分の未来を形成することにおいてである。」

「はい、もしくは、いいえ」
唯物論は世界観であって
唯物でなければならないという観念は物ではない
「物質主義とは、すべてになんらかの説明を
用意している世界観だが、
それ自体の存在は説明できない。」

「第三次世界大戦」
わたしたちは第三次世界大戦のまっただなかにいる
「この戦争は領土ではなく、時間の戦争」で
「子孫がそこで生きるとはたやすくない」
できるのは「子孫はなにか思いつくにちがいない」
そう「良心をなだめる」ことだけだ

「理想的」
「いつの日か、コンピュータが小説や詩や戯曲を
代わって書けるようになる」かもしれないが
それが「理想的」なものになるとしても
「なにが`理想的、なのかはだれが決めるのか？」

「知的世界のブローカーたち」
だれもが読み書きできるようにと
教えこむ教育者・知識人がいる
しかしそこには「代償」がある

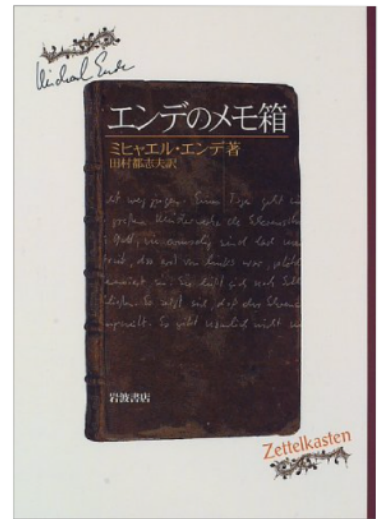
「変身」
大いなる秘密のなかに入るには
「その秘密により変わらねばならない」
しかし秘密をつかんだ者は
「その秘密をどうしても教えることができない。
かれらが理解できないからだ。」
「こうして秘密はみずからを守る。」

「汝の十字架を負え……」
水平と垂直は`今、ここ、`で交叉するが
「時間のどの瞬間をも絶対者との関連に見ることは、
苦しみを受け入れることである。」

「世界を変える？」
「この世界を変えねばならない」といわれ続けてきたこと
は
「`よりよくする、`という意味」だったが
この言葉は「今日でもなお避けられている。」
「そろそろ別の世界をさがさねばならないほどだ。」

加えて岩波現代文庫版の「あとがきに代えて」で
訳者の田村都志夫がエンデの文学における「悪」について
示唆していることにもふれておきたい

「真に悪い人はいない」
「「悪」というのは、ある「善なるもの」が
間違った場所にいるに過ぎない」からだ



■ミヒャエル・エンデ（田村都志夫訳）『エンデのメモ箱』
（岩波書店 1996/9／岩波現代文庫 2013/5）

「悪は虚無からこの世へ出現する」

「悪を見つめるエンデの視線は、そこから悪が現れ、
そこへ悪が消えていく次元として虚無を見る」

エンデのファンタジーは子どもだましの読み物ではない
ファンタジーそのものを考察することが求められ
「その裏返しとして、虚無を見つめることをも勧めている」

虚無を見つめることは
自由を獲得することでもあるだろう
そしてそのためには創造力が必要とされる

逆にいえば創造力によって得られる自由なくしては
「虚無」に呑みこまれてしまうことになる

しかし創造力も自由も
「大いなる秘密」のように
「単純」ではあるとしても
「これほどむずかしいことはな」く
だれもそれを与えることも教えることもできない

気をつけなければならないのは
「知的世界のブローカーたち」に
「読み書き」を教えられ
そこから得られる知識を覚えむことで
それを理解したと思いこむことだ

知識と智慧は異なっている
という知識を得るのは簡単だが
知識と智慧のあいだには超えがたい懸隔があり
水平と垂直の交叉する十字架で
血を流さなければその懸隔を超えることはできない

古田徹也の著書・訳書（ウィトゲンシュタイン）については
幾度かとりあげたことがあるが
今月10月29日に刊行される予定の
『言葉なんていない？ ―私と世界のあいだ』（創元社）の
「序章」及び目次がすでに創元社noteで公開されている

その公開部分及び
すでに紹介したことのあつた以下の二書から
そのテーマに関係すると思われるところをとりあげる

『言葉の魂の哲学』（mediopos-1251(2018.4.19)）
『いつもの言葉を哲学する』（mediopos2595(2021.12.24)）

さて『言葉なんていない？』は
2023年4月にスタートした創元社の新しい人文書シリーズ
「あいだで考える」の新刊（刊行予定）だが
「10代以上すべての人のための」と付されているように
言葉をテーマとした哲学的な内容が
親しみやすい表現で書かれている

私たちの日々使っている「言葉」は
たとえそれが不正確だったり
うまく意図が伝わらなかったり
独り歩きして誤解やトラブルをもたらしたりもするが
「それでも、言葉は私たちの生活に欠かせない」

言葉とは
「私と私以外の人々をつないでくれる「媒介物メディア」」なのか
「両者を隔へだてる「障壁バリア」」なのかを問い直すことで

「慣れ親しんだ言葉に、あらためて目を向け」
「言葉に対する新しい見方」を身につける大切な機会として
言葉の役割を多様な面から見直すことが提案されている

『言葉の魂の哲学』では

カール・クラウスおよび
言語認識においての継承者であるウィトゲンシュタインが
「生活の流れのなかで用いられ、
生活のかたちを反映している個々の言葉に注意を払い、吟味し、
それらを立体的に理解できるよう努めること」を
両者ともに重要視していることが示唆されている



古田徹也『言葉なんていない？ ―私と世界のあいだ』（創元社 2024/10）
＊創元社note部(2024/9/27)での「序章」の掲載内容から
■古田達也『言葉の魂の哲学』（講談社選書メチエ 2018.4）
■古田 徹也『いつもの言葉を哲学する』（朝日新書 2021/12）

ウィトゲンシュタインにとって哲学とは
ひとつの見方に縛られないで
「現在の見方を相対化する別の見方に気づ」き
「様々に異なる用法を自由に記述することで
「言葉が不断に織り込まれている自分の生活や他人の生活について
「本当に誠実に考えること」なのだ

「学問上の専門用語と化した概念をめぐるパズルを解き、
もっともらしい理屈をこね」るのが哲学ではない

『いつもの言葉を哲学する』では

「創意のある言葉やユニークな言葉を繰り出すこと」ではなく
「自分がこれまでの生活のなかで出会い、馴染み、使用してきた」
じぶんにとって「じっくりくる言葉」で
「これまでの自分自身の来歴と、自分が営んできた生活のかたちを、
部分的にでも振り返る実践」となる言葉を使うことが示唆されている

「〈こういう場合に人はこう言うものだ〉、
〈こう言うのが世間では正解だ〉という暗黙の基準に
しばしば支配されている」ような
「「お約束」に満ちた流暢な話しぶりや滑らかな会話」には、
「言葉に責任をもつべき自分がそこに存在しない」からである

「自分の言葉で話す」ということは
権威からくる受け売りでも
常識とされていることを垂れ流すことでも
難しい言葉でじぶんを偉く見せようとする事でも
またそのことで自分を認めさせようとする事でもなく
まさに自分を有り体にあらわすことのできる言葉で
「本当に誠実に考え」ながら話すということにほかならない

松岡正剛が亡くなって二か月近くになる

「遊」の時代に
なにがしかの影響を受け始めてから
半世紀近くが経っている

ふりかえってみると
いちばん影響を受けたといえそうなのは
「編集」という視点をとることで
どんなテーマについても
ジャンルや専門などといった垣根など気にしないで
横断的に見られるようになったことだろう

なぜか「追悼」する気にはならないままだが
松岡正剛的な視点から得てきたことのなかから
思いつくものをとりあげていければと考えている

今回は「日本文化」にかかわる
重要なテーマである「型」「間」について
『日本文化の核心』（2020）と『日本流』（2000）から

日本の「型」の話がむつかしいのは
それが欧米ではたとえば
「西洋音楽の拍子は分割可能であり、足し算可能」なのに対し
拍子が伸びたり縮んだりする（「間拍子（まびょうし）」）
ということに典型的にあらわれている

つまりその「型」においては
「パターンやスタイルやフォームに
出たり入ったりする「間」や、
生身の演奏者や踊り手や芸者が関与しつつ包まれる
「場」のことこそを、いろいろ考慮しなければならない」

松岡正剛が「型」に関心をもったのは
「形代（かたしろ）」の役割に驚いたことからだという

形代とは「型そのもののことではなく、
形が力をもつようにするエージェント（代理物）のこと」

形代のほかに「物実（ものざね）」や
「憑座（よりまし）」といった考え方もあったように

「日本には「座」や「場」にかかわって
何かが依ってくる、やってくる、出現する」
そうしたありようが継承されてきていて
それが「間」に魔法のような力を与えてきた

日本の伝統芸能は
その大半が「間の芸能」であるといえるが
伝統工芸や武芸・武道といったものも同様に
それが伝承されるとき
「秘伝」「口伝」というをとってきた

そしてそれはただ秘密にされてきたというより
その「型」を教えるということそのものがむずかしい

「口伝という様式には、
われわれが説明しようとしても説明できない
何かが宿っているように思えるにもかかわらず、
それが取り出せない」のである

それは「不立文字」であり
「以心伝心」であり「師資相承」であって

そうした「型の文化」は
「その行為のシステムの中にしか
返答をもっていない」がゆえに

伝統芸能や職人たちが
「そんなものは自分で盗むんだ」というように
「作法や真意を公衆に説明せよと言われても、
自分が盗んで体に入れたものしか、
その「型」や「間」にあたるものはない」

「そのかわり、一人一人が自分なりの「間」をもっているし、
自分なりの「秘伝」をもっている」

あえて説明するとしたら
「日本の芸の最も高度な習得到達点は
それぞれの芸の間というものである」
ということであり
それは世阿弥が「せぬ隙」と言っていたものと通じている

松岡正剛は
「では、どうするか。」
ということで

「直截に「間」や「型」の現場に介入して
これをまるごと次代へ渡すための準備をしておくこと」

そして「伝統芸能や伝統工芸や伝統建築のコンセプトを、
新たな装置と構成によって分解したり編集したり、
組み立て直すこと」を示唆しているが



- 田村正資『問いが世界をつくりだす メルロ＝ポンティ 曖昧な世界の存在論』（青土社 2024/8）
- M. メルロ＝ポンティ（滝浦静雄・木田元訳）『見えるものと見えないもの——付・研究ノート』（みすず書房 1989/9）

日本文化にかぎらず
さまざまな「型」は
たとえどんなに丁寧な「開示」されたとしても
じぶんの「体」に入れたものしか
「伝承」することはできないのではないだろうか

それは神秘学的な智慧に関しても同様であり
「秘密」を閉ざされたものにせず公開したとしても
会得・体得しないかぎり
それが「秘密」であることさえわからない

変えることができるのは
その「開示」の仕方だけなのだ

こんなたとえがある
スプーンは食べものを運ぶことはできるが
いつまでもじぶんでそれを味わうことはできない

ひとにかかわって
感じたり考えたりすることはできない
というのと同様である

『黄昏の光 吉田健一論』は
松浦寿輝が「吉田健一についてこれまで書いてきたこと、
喋ってきたことのすべてを集めた本」である

そのなかに「森有正と吉田健一」と題されたエッセイがある

森有正と吉田健一は「生年も没年もほぼ同じ」で
一年違いでともに六十五歳で亡くなっている

両者とも「西欧派」知識人（フランス系及びイギリス系）だが
「「西欧」との付き合いかた」は「鮮烈な対比を示している」

吉田健一は
十八歳でケンブリッジ大学キングス・カレッジに入学するが
「ヨーロッパで見るべきものは見たと感じ、
とにかく母国に帰ろうと決断し」半年ほどで中退し帰国する

それに対し森有正は
三十八歳（一九五〇年）になって留学し
そのままフランスに終生留まることになる

「パスカルやデカルトを「本当に」理解するためには」
その地で「「経験」の深まりを感得することが不可欠だ」
そう考えたのである

しかし二人は「方向こそ正反対だが、
どちらもその年齢でしか可能でなかった選択であり、
それに以降の生の総体を捧げ尽くしたという点では」
共通している

そして「歴史的宿命を正面から引き受け、
それぞれなりにこれしかないと思い定めた道を
最後まで歩き通した」

森有正は「「経験」という語に」
吉田健一は「「時間」「変化」という語に、
「独自の深さと広がりを与えてみせた」のである

森有正の「経験」は「体験」と対比することで
その意味をとらえている

「人間はだれも「経験」をはなれては存在しない」が
どんなに深い経験も
過去のある一つの特定の時点に凝固すると「体験」となり

それは「一種の経験の過去化」であって
「経験は、未来へ向かって開かれている
という意味がなくなってしまう」というのである

経験はその内容が
「絶えず新しいものによってこわされて、
新しいものとして成立し直して」いかなければならない

吉田健一の「時間」と「変化」についていえば
『時間』は最後期の著作であり
さらに『変化』は未完の遺作でもある

それぞれの著作（新装版）には
松浦寿輝による「解説」が掲載され
それが『黄昏の光 吉田健一論』にも収録されている

『時間』では「「時間」の絶えざる経過について語」られ
『変化』ではそれを享けるかたちで
「その「時間」が世界に何をもたらすのかという問い」が
展開されている

単純にいえば「時間はただ経過する」こと
そして「世界は不断に変化する」ということだが
いうまでもなく一般論として語られているのではない

それは「不断の「変化」の相の下に「持続」」してゆく
「言葉の運動の物質的現前それ自体を体感すべき」もの
として語られていて
さらにいえば「一瞬ごと、一行ごと生起しつづける
「生の跳躍」」としてあらわれている
そこにはおそらくベルクソンの影響がある

さて本書に収録されている講演「光の変容」に
短篇集『旅の時間』中の一編である「航海」から
老人が夕暮れに船の甲板にでて主人公（西野）に語る
老いと死についての言葉が引用紹介されている

「かうして段々日が暮れて行く訳ですが、」と老人が言った。
「夕方つていふのは寂しいんぢやなくて豊かなものなんですね。
それが来るまでの一日の光が夕方の光に籠もってゐて
朝も昼もあつた後の夕方なんだ。
我々が年取るのは豊かな思ひをすることなのと同じなんですよ、
もう若い時のもやもやも中年のごたごたもなくして
そこから得たものは併し皆ある。」

本書の最初に収録されている
「黄昏の文学」という講演では



- 松浦寿輝『黄昏の光 吉田健一論』（草思社 2024/10）
- 『吉田健一集成1-9』（新潮社 1993/11-1994/6）
- 『森有正エッセー集成 1～5』（二宮正之の編ちくま学芸文庫 1999/6-1999/10）
- 森有正『生きることと考えること』（講談社現代新書 1970/11）

「吉田健一は老いや余生の時間を、今までの人生の記憶が
そこにぜんぶ豊かに照り映えているような、
価値ある時間として顕揚してきた」といい
それが「わたしたちを大いに勇気づけてくれる」
といいながらも

この講演のとき自身が当時六十八歳を迎えていたなかで
吉田健一の享年を追い越した自身の現在を顧みながら
そうした「黄昏の時間の豊かさ」ということについて
若干複雑な思いを抱いてもいたようだ

しかし『時間』と『変化』の解説の最後にそれぞれ
若い人に対しその「たぐい稀な書物」を
読み親しむことを願っている旨の言葉が添えられているように
吉田健一の文章には年を経るごとに味わせる
それだけの豊かさがあるということはいうまでもない

森有正の「経験」も
吉田健一の「時間」と「経験」も
過去に向かってはいない
つねに新たに生起するものへの「生の跳躍」である

そして「黄昏の時間の豊かさ」には
おそらくさらなる意味がある

両者の享年を越えてからこそ
両者の「経験」しえなかったかもしれない
そんな新たな「生の跳躍」も「経験」し得るだろうからである

「ユリイカ 2022年8月号 特集=現代語の世界」から
飯間浩明・川添 愛・山本貴光による鼎談
「現代語という不可解なものー語彙と文法の波間に」
という主に国語辞典をつくるにあたっての
言語の変化への対応などについてとりあげたことがある
〔mediopos2810（2022.7.28）〕

このところかつて使っていた言葉が
現在ではほとんど使われなくなっていたり
現在使われている流行語の意味が
わからなかったりすることもあることから
「現代語」の「現在」について
掲載されているいくつかの論を参考に
あらためて考えることにしたい

まず米川明彦「現代は俗語の時代」より

米川氏は「現代社会の産物が俗語であり、
現代社会を反映しているのが俗語である」という

米川氏はかつて一九九〇年代の著書において
「それは以前とは質が異なっていた」ということから
一九七〇年代以降の若者ことばを
「現代若者ことば」と名づけたが
特に二〇一〇年以降スマホに等が一般化することで
そこから生まれた若者ことばを
「新・現代若者ことば」と名づけている

現代はソーシャルメディアの過剰な利用で
個人が画一化され群衆になってしまっていると言われるが
そのような状況のなかで
「意味の疎外化」と「ことばの脱規範化」が加速している

その根底にあるのは
「情報機器使用の問題以前に、
通じ合うことを求めない現代社会があるのではないか」
という

そうした現象のマイナス面ばかりに目が向きがちだが
「問題は使う人の側にあり、社会にある」

最初の繰り返しになるが
「現代社会の産物が俗語であり、
現代社会を反映しているのが俗語である」

まずはその事実を目を向ける必要がある
ということなのだろう

続いて窪園晴夫「昭和の日本語と現代語」より

「現代日本語に特徴的なのは、
流行語や新語の数と、その新陳代謝の速さ」であり
その際に「夥しい数のカタカナ語（外来語）と略語（短縮語）」
が
生まれることで世代間ギャップが生じている

その問題は平成や令和の時代にはじまったことではないという

窪園氏は第二次世界大戦後にシベリアに抑留され
二〇世紀末に五〇余年ぶりに帰国した
蜂谷彌三郎のエッセイを紹介している

蜂谷氏はその間の日本語の変容ぶりに困惑したといい
とくにカタカナ語と略語の問題を含む次の五つの点を
その顕著な変化としてあげている

- （１）カタカナ語、外来語、略語が氾濫していること
- （２）必用以上に敬語が横行していること
- （３）使用漢字の削減、たとえば「涙囊部」を
「波のうぶ」と書くこと
- （４）改まった場所で「すいません」のような俗語や
造語を使うこと
- （５）語尾の「ジャン」を付けたり、語尾を上げた話し方
（自分のいいたいことを相手の理解や判断に委ねる
あいまいな言葉）をすること

上記の五点はおそらく現在進行形でもあるようだ

そうした変化は先の米川明彦の論にもあるように
「現代社会を反映している」がゆえのものだろうが

そこにはかつて中国の影響を受け漢字を日本語化したように
英語を中心とした言葉を日本語化する傾向や
過剰なまでに易しい表記等を啓蒙したりする
教育やマスメディアの影響といった要因もありそうだ

さらに平山亜佐子
「一〇〇年前の流行語と一〇〇年後の普通語」より

平山氏是一九一九年から一九四〇年に出版された
三〇余りの流行語辞典からいわゆる流行語を集めた
『戦前尖端語辞典』を刊行しているが

「ツンドク」「音痴」「イミシン」など
そこには今でも使われている言葉もあり
また各国からの外来語も多いという



□ユリイカ 2022年8月号 特集=現代語の世界
ー若者言葉から語用論まで」所収
■米川明彦「現代は俗語の時代」
■窪園晴夫「昭和の日本語と現代語」
■平山亜佐子「一〇〇年前の流行語と一〇〇年後の普通語」

興味深い例をいくつか挙げてみる

「～的」というのは昭和初期の流行語である

「てよだわ語」
「そうよ」「やめてよ」など
ももとは江戸時代の芸者の言葉

外来語では
ロシア由来の「ボル（シェビキ）」や「アジト」
フランス語由来の「アトリエ」「デッサン」「シュール」
ドイツ由来の「ゲシュペンシュテル」（怪物）など

朝鮮語由来ではこんな言葉も使われた
「ナッポンサラミー」（いやな人、悪い人）

現代と戦前の流行語を比べると
かつてより「均質化」しているのではないかという
つまり英語とくにアメリカ由来が多く
それがあらゆる分野に及んでいる

「現代の流行語も一〇〇年後には発見があるのだろうか、
未来の人に聞いてみたい」
平山氏はそう結んでいるが

「現代社会の産物が俗語であり、
現代社会を反映しているのが俗語である」
という視点からすれば
教育においても各種メディアにおいても
むしろ言葉の多様な表現が制限され
創造性を排する方向に進んでいるように見える

現代社会は言葉を豊かにする方向に
進んでいるとはいえないようだ
まして「思考」の役割さえAIに置き換えてようとしている

一〇〇年後
はたして…である

ヒュー・ロフティング『ドリトル先生航海記』が
福岡伸一の「100分de名著」になり

10月のNHK・Eテレで放送されている

『ドリトル先生』のシリーズは全十三巻
(第十三巻は作者の死後遺稿がまとめられたもの)
『航海記』は二巻目にあたる

シリーズはあの井伏鱒二の訳で
岩波少年文庫として刊行されているが
福岡伸一はみずから『航海記』を訳している(新潮文庫)

テキストには「フェアネスとは何か」と副題が付されている

福岡伸一は「ドリトル先生のようにになりたいと切に願い、
そのために生物学者になった」のだという

ドリトル先生は「誰に対しても、どんな生き物に対しても」
常に公平(フェアネス)であり
「あらゆる生命のありように、真摯に耳を傾け」る
「センス・オブ・ワンダーを持ち続けた、
本当の意味での生物学者」なのだ

ドリトル先生は「ナチュラリスト」と自称している
それは「標本や剥製を集めて分類したり、
分析したりする博物学者」なのではない

そのように福岡伸一も
「およそ二十年にわたる分解的生命研究への脱線と、
分子生物学者としての挫折を経験」した後
ドリトル先生の偉大さに気づき
子どもにころにそう思っていたような
「ナチュラリスト」への道を歩むようになる

その「ナチュラリスト」になるための条件について
講義では「ピュシス」の大切さとともに
新たな「ロゴス」を見つけることが示唆されている

「誰しも最初は「ピュシス」として
この世界と出会」い
その「センス・オブ・ワンダーから出発」するが
「やがて、もっと知りたい、謎を解きたい、
隠された宝物を見つけたいと
「ロゴス」の旅に出る。」

しかし「ロゴス」は世界を切り分け
そこで「切り分けられないものや、
切り分けると失われてしまうものは、
ロゴスの世界では「ない」ことにするか、
「見えない」ことにするか、
もしくはタブーにして、見えなくしてしまう。」

だからといって
ロゴスの良き側面を捨てるわけにはいかない

「必要なのは、新しいロゴス、
より解像度の高い言葉でピュシスを語ること。
これまでのロゴスでは捨象されてしまっていた
ピュシスを語り直すこと」なのだという

そのためにも
「ロゴスでは語り尽くせないピュシスがあることを
教えてくれる」ドリトル先生のように
自然を見つめ直すことで
「ピュシスの豊かさを語り直すロゴスを見つける」が
人生をまさに「航海」するにあたって重要になる

子どもに戻ることはできないし
戻っても仕方がないけれど
偏狭な「ロゴス」によって閉ざされた
「ピュシス」への扉を開けることで
子どもにころにもっていた
「センス・オブ・ワンダー」を思い出せば
世界の景色はずいぶんと変わってくるはず



- 福岡伸一『ロフティング『ドリトル先生航海記』』
(2024年10月 NHKテキスト)
- ヒュー・ロフティング(福岡伸一訳)
『ドリトル先生航海記』(新潮文庫 2019/6)

現代思想2023年12月号・特集「感情史」に
久山雄甫「雰囲気学をひらく」が掲載されている

「雰囲気学」という名称は聞きなれないが
日本で新たな学術領域として
「神戸雰囲気学研究所（K O I A S／コイアス）」が
設立されたのは2022年のこと

英語のmood・フランス語のambiance
ドイツ語のStimmung・中国語の氣氛など
世界各国でひろく使われている
「雰囲気（英語：atmosphere）」に関連する現象を
分野／文化横断的な視点から包括的に研究しているという

きわめて即物的な技術につながるものばかりが
研究の対象となっているように見える現代に
「雰囲気」なるものの研究所が
よく設立される運びとなったものと驚かされる

久山氏も記事の最後に
「フニキガクなどと言え、
何とも浮き世離れして聞こえるだろう。
社会実装にすぐ役立つものでもない。
けれどもこのテーマならば、周回遅れのランナーのように、
どこかで未来社会の切実な問題と切り結ぶことも、
ひょっとしたらないともかぎらない。」としている

「雰囲気学」がどういうものか
記事でふれていることだけしかまだわからないが
その一部を紹介してみることにしたい

「雰囲気」はそれを対象化することはむずかしい
いうまでもなく主客二元論とは相容れないところがある
つまりヨーロッパ近代の人間観が前提となっていない

「雰囲気は、人間がみずからを周囲世界とは異なる主体として
意識する点につねに先行している」がゆえに
「人間のみならず、この構造はすべての生命体に
多かれ少なかれ共通している」

そのため「雰囲気学では生命体を、
環世界に開かれた存在として、つまり開放系として考える」

「雰囲気」という概念はヨーロッパで生まれ
たとえば英語のatmosphereは
近代ラテン語をもとにした造語atmosphæraに由来している

日本語の「雰囲気」という言葉は明治維新前に
オランダ語luchtの訳語として見られるようになり
はじめは自然科学における「大気」を意味していた

「雰囲気」という言葉が使われるようになったのは
「自然からの乖離が決定的になり、
自然の不在が意識されたがゆえに、
自然への眼差しが生まれたという
近代の反転的な情況」があったようだ

K O I A Sにおける研究では考察の対象を
雰囲気のもつ近代以降の近代的性格の問題化だけではなく
その枠組みを超え歴史文化的な多様性に注目する

それに関連する重要語でいえば
洋の東西における「プネウマ」と「気」がある
（東と西の間にはサンスクリットの「プラーナ」）

プネウマは古代ギリシア語であり
それに対応するラテン語がスピリトゥス

「プネウマはもともと息吹や風の意味だったが、
思想史の流れとともにだんだんと非物質化し
「精神化」ないしは「霊気化」していった」

天と地をむすびつける聖霊である聖なるプネウマは
やがてキリスト教の根源的世界観となる

東アジアにおける「気」も
「プネウマに似て、胎内を流れつつ体外にも漂い、
内部と外部の二項対立を軽々と飛び越えていく。
さらには精神と物質にまたがり、
自意識とも血流や神経とも深く関わる。」

さらにいえば日本語における
「場」や「間」という言葉も
雰囲気学的視点から考えていく必要があるという

こうした「プネウマ」や「気」に関しては
神秘学的な考察がその核心に近づけるようにも思うのだが
アカデミックな学問としては
その範囲内で考察されざるをえないところがあるようだ

ちなみに雰囲気を正面から取り上げた数少ない学術研究として
ヘルマン・シュミッツの「新現象学」（一九六〇年代以降）と
ゲルノート・ベーメの「新感性学」（一九九〇年代以降）が
紹介されている



■久山雄甫「雰囲気学をひらく」
（現代思想2023年12月号 特集「感情史」）

さて設立されたばかりの「雰囲気学」だが
記事から想像するところ久山氏は
特に文学にみられるような
「言語の魔法」に関心があるようだ

「文学を味わい、その世界のなかに入り込むことは、
「いま・ここ」にはない雰囲気に
ふれることそのものであろう。
ないはずのものをありありと感じさせる「言語の魔法」は、
こうして、存在と非在をめぐる雰囲気学の
最難関を突破するための鍵になりうる」という

雰囲気は対象化できず
見ることも聴くこともできず
「いま・ここ」にはないこともある

しかしそれらの存在へと意識を向け
その世界をひらくことで得られるものは
即物的なものに席卷されている現代において
なにものにも代えがたいものとなるのではないだろうか

『群像』で連載中の
石井ゆかり「星占いの思考 56」（11月号）で
冒頭に夏目漱石の『坊っちゃん』から
坊っちゃんの清への思いが表現されている
短い一文が引用されている

“返さないのは清を踏みつけるのじゃない。
清をおれの片破（かたわ）れと思うからだ。ゝ
（この文の文脈については以下「六章」の引用で）

いまさら『坊っちゃん』と思いきや
「名作」の「名作」たる所以
再読すると新たな視点が浮かびあがる

「50歳」になった石井ゆかりは
「なぜ清がそんなに坊っちゃんを愛したのか」に注目する

再読で得られたのは
「ラストシーンまで、この人がヒロインなのだ」
ということである

そして坊っちゃんの一人称で語られる『坊っちゃん』は
その全体で「「坊っちゃんがこういう人間だったから、
清はこの子に愛情を持ったんですよ」
とされているようだった」という感想をもつ

なぜ今回この『坊っちゃん』がとりあげられているのか

星占いで「古い」「老人」を象徴する「土星」は
いま「記憶、救済、癒しを象徴する魚座に位置し」

「坊っちゃんのような血気盛んな、若い男性のイメージ」を
象徴する「火星」はいま魚座に位置しているが

その土星と火星がこの時期120度の位置関係にある

120度というのは「もっとも調和的な、
スムーズで強い結びつきを意味する角度」である



- 石井ゆかり「星占いの思考 56 50の再読」
（群像2024年11月号）
- 夏目漱石『坊っちゃん』（岩波文庫 1989/5）

それが「まるで『坊っちゃん』の世界観のよう」
だというのである

「今、星々は魚座、蟹座など水の星座に集合している」が
「水の星座は感情と共感、情愛の世界である」

それは「損得勘定、換金できる価値から、一番遠くにある世界」
石井ゆかりはその例として
坊っちゃんが「旅館で法外な心付けをはずむシーン」や
「不当な昇給を拒むシーン」を挙げている
（以下「二章」「八章」の引用で）

現代はカネさえあればの世界であり
老いを悪だとし死を隠蔽するアンチエイジングの世界である
そして生の世界はA Iに象徴されるように
機械的なヴァーチャルなものに変換されようとしている

そんななかでこそ
「なぜ愛するのか」
という問いが
深い意味をもってはこないだろうか

愛は損得勘定などという虚妄を軽々と超え
愛することそのもののなかにその意味がある
『坊っちゃん』はそのひとつの象徴としての
物語としても読むことができるのかもしれない

『文學界』で連載されている東畑開人「贅沢な悩み」はこれまで随時とりあげてきているが
前回「序論」としての第1部が終わった後三ヶ月間休載され
第9回が「第2部」として再スタートされている

第1部で論じられていたことを
簡単にまとめると以下ようになる

臨床心理学には「二柱の神」
「生存」と「実存」があり
「生存」は「いかに生き延びるか」を問い
「実存」は「いかに生きるか」を問う

1995年に起こった
阪神・淡路大震災とオウム真理教事件を契機として
「実存」へむかう心理療法は
「贅沢」とみなされるようになったが

たとえそれが「贅沢」だからといって
「生存」するだけの心理療法だけで
「実存」へと向かう必要がないとはいえない

「二柱の神」を結ぶ方向が求められる

第2部ではそれを受け
「生存と実存とはそれぞれに何者で、
いかなる因縁があって事件は起きてしまったのか」を探る

東畑開人はクライアントと最初に出会う
「インテーク面接」での「アセスメント」（見立て・診断）で
「心を可能にする仕事」か「心を自由にする仕事」かを

「火急性／不急性」「外部性／内部性」「現在性／歴史性」
という3つの判断基準に基づいて分別するという

「心を可能にする仕事」は
クライアントの「生存」に関わるものであり
「心を自由にする仕事」は
実存の問題に向き合うものである

「火急性／不急性」は
「クライアントの抱えている
苦悩の緊急度や切迫性をめぐる基準」であり

「外部性／内部性」は
「クライアントを苦しめる原因が、
外部の環境に存在しているか、
ご本人の性格や葛藤のような
内部に存在しているのかについての判断」であり

「現在性／歴史性」は
「クライアントの訴える苦悩が、
今回限りのことであるか、
以前から続いてきているか」の問題である

インテーク面接ではその9割弱において
心を可能にする仕事を選択される
3つの判断基準においてひとつでも前者があれば
心が不可能になっていると判断されるからだ

東畑開人は「心」を
「箱のように輪郭があり、
奥行きのあるものとイメージしている」という

「輪郭と奥行きが失われるときに、
心は不可能になっていて、
それらが確保されると内面という次元が立ち現れる」

「心が可能になる」とはそういうことだ

つまり問題は「心が不可能になること」にある

さて今回の記事の最初に
沢庵禅師の『不動智妙録』からとして
「心こそ迷はす心なれ、心に心心ゆるすな」
という言葉が置かれている

「心こそが心を迷わすものである。
心のことに気を許してはならぬ」という意味だが
これは『不動智神妙録』の締めくくりとして
記されている古歌である

連載の冒頭に唐突に引用されているだけだが
心が不可能になること／可能になること
心が不自由になること／自由になること
そこにかかわることが臨床心理の仕事であり

心を可能にし自由にするためになにができるか
それがその仕事の課題の表明として理解できる



- 東畑開人「贅沢な悩み 連載第9回
第2部 生存編――心を可能にする仕事
5章 白さんのカラフルな刺繍
――我痛む、故に痛みあり、ゆえに我なし」
（文學界 2024年11月号）
- 沢庵（池田諭訳）『不動智神妙録』（徳間書店 1997/8 18刷）

まずは外界から区別された
自分だけの内的空間である「箱」をもつことで
「心を可能」にし
さらに箱のなかで不自由になっている心を自由にする

参考までに『不動智神妙録』から
とらわれた心は動けないこと（不動明王）
心を止めないこと（石火の機）
ところを一力所に置かないこと
放たれた心を取り戻すこと
といったところを引いてみた

心はなにかとやっかいだ

『群像』で連載されていた
(2023年7月号～2024年4月号まで全10回の連載)
戸谷洋志「メタバース現象考 ここではないどこかへ」が
『メタバースの哲学』として単行本化されている

連載の際に幾度かとりあげたことがあるが
単行本化されるにあたり
群像2024年11月号で自著の紹介(本の名刺)で
『メタバースの哲学』を書き終えた時点での
著者の考が述べられているのでそれを取りあげる

『メタバースの哲学』では
「メタバースへの「欲望」を観点としながら、
仮想空間と物理空間の関係」が考察されている
それは「人間」と「現実」との関係でもある

メタバースとは
「バーチャルリアリティーによって構成された
架空の世界」であり
「そこではユーザーは
アバターと呼ばれるキャラクターを動かし、
「第二の自分」として生活する」

いうまでもなくバーチャルリアリティーの世界も
そこにいる「第二の自分」も
生きた身体をもった自分やその世界ではない

メタバースの欲望の根源は
物理空間ではかなえられないような
「なりたい自分になれる」
ということにあると言われる

しかしその欲望は「見方を変えれば、
自分で自由に変えることのできない
物理空間への嫌悪の現れでもある」

戸谷洋志が『メタバースの哲学』を
執筆しようとしたのは
ある大学で開催された
教員の授業実践を交換し合う研究会で
「バーチャル美少女受肉」することの教育効果を検証する
という発表に違和感を抱いたことからだという

「バーチャル美少女受肉」(バ美肉)は
「美少女のキャラクターをユーザーの分身として
映像化すること」であり
「ユーザーはそれを「第二の自分」として
自由自在に動かすことができる」

そうした技術を応用して
「教員が美少女の姿をして授業をすると、
学生の学習意欲が向上する」というのがその発表だった

「自分のような「おじさん」が話すよりも、
美少女が話した方が、学生が聞いてくれるのではないか」
と仮説を立てて実践してアンケートをとったところ
肯定的な評価が得られたというのである

戸谷洋志が違和感を抱いたのは
それは「おじさんの話が聞いていられないという傾向を、
加速させる」もので
「もしも自分が現実にはおじさんでしかないのだとしたら、
それは端的な自己否定なのではないだろうか」
ということだった

「バ美肉する教員が、
自分がおじさんであることを否定しているように」
メタバースへの欲望は
物理空間という現実を否定することでもあり得る

しかし今回の記事で示唆されている
重要な問いはここからである

メタバースは科学技術によって提供されるサービスだが
「仮想空間と物理空間は、
テクノロジーの有無と本来は関係がない」
「技術があろうがなかろうが、
この世界を仮想的なものとして眺めることができる」

はたしてそれは
「自らの身体を否定するのと同じ仕方で、
自分の何かを否定しているのだろうか」
戸谷洋志は『メタバースの哲学』の執筆後
そう考えているという

それはこの世界そのもの
現実そのものを問い直すことにつながる問いだろう

連載されていた「メタバース現象考」の副題は
「ここではないどこかへ」だった
(以下は著書や記事から離れる)

「ここ」にはおそらくすでに
「ここではないどこか」も内包されている
それは人間の意識のありようと関係している



- 戸谷洋志「本の名刺 メタバースの哲学」
(群像2024年11月号)
- 戸谷洋志『メタバースの哲学』(講談社 2024/9)

たとえば精神分析において
人間には「欲求」と「欲望」があるとされ
「欲求」が生理的な満足を求める傾向であるのに対し
「欲望」はより社会的・文化的なものを求める傾向だが
いわゆる脳科学的にはその両者は区別できない

「欲求」は動物とも共通してもっているけれど
「欲望」はそれを一般化することはできない

メタバースであれ物理空間であれ
その「欲望」は「ここではないどこか」への
個人的な情動としてあらわれる

それを「自己実現」として肯定する向きもあるが
それはひょっとしたら
「自分がおじさんであることを否定しているように」
「自分の何かを否定」していることなのかもしれない…

『エスの系譜』（二〇一〇年）
『言語起源論の系譜』（二〇一四年）に続き
互盛央『連合の系譜』（二〇二四年）が刊行されている
いわば「系譜」三部作であり三冊で一体をなしている

あまりにも大部で
しかも多岐に渡る視点が盛られていることもあり
その全体を理解するまでには到底至らないだろうが
「週刊読書人」に掲載されていた
宇野邦一による「読み」をガイドにしながら
「連合」の意味するところについて
少しばかり考える機会としておきたい

『連合の系譜』の「プロローグ」は
グレン・グールドが一九五五年にデビュー盤として録音された
バッハの《ゴルトベルク変奏曲》を
一九八一年に再録音した話がかかれている
しかもそれは生前最後のアルバムとなった

グールドはなぜ《ゴルトベルク変奏曲》を再録音したのだろう

プロローグではグールドの話に終始しているものの
『連合の系譜』は音楽だけについて述べられているわけではない
イギリスの思想家オーエンが
「全諸国民の全階級の連合」を夢見たように
本書は「人々の分断が深まった現代において」必要とされる
「連合を可能にする新たな原理」を問うためのものだという

そうした「普遍的連合」の可能性を考えるための導きとして
グールドの音楽についての論考が
いわば経糸となって論じられていくのである

グールドが《ゴルトベルク変奏曲》を再録音したのは
最初の録音には
「録音を行った人物の精神（spitit）を
識別すること」ができないからだという

「音楽作品は、どんなに長いものであっても、基本的に」
「パルスー速度、リズムの不変の参照点」をもっているはずだが
それは「識閥下で経験」され
「「あらゆる人」が「骨の中」で感じ」られる…

精神（spitit）という言葉はもともと
古代ギリシアで万物の原理とされた
プネウマ（氣息、風であり精神、魂、霊）が源となっているが
「観察と実験による因果の分析」を行う近代科学において
非理性的・非科学的なものだとして
プネウマ＝精気の観念は排除されるようになる

しかしそうした時代になっても
ベルクソンやウィリアム・ジェームス
そして精神分析などにあらためて見出されていたように
「プネウマ」が忘れ去られてしまったわけではない

ソシュールも当初言語学において
「シニフィアン-シニフィエの結合」や
「範列-連辞の系列」のように
プネウマへと向かうことはなかったものの
やがて言語の本質を語るために
「潜在性としての無限の連合」について考えざるをえなくなる

互盛央はそれを「言語の「潜在的」次元」へと拡張し
「連合」への問いが「果てしない秩序、その連結、
そして混沌に広がり、諸領域を横断」しながら進められていく

話を経糸のグールドの話に戻すと
本書においてそうした「系譜学的探求」を導くのが
「音楽」なのである

グールドは「音楽をめぐるほとんどの常識に逆行する
反音楽・逆音楽の実験を」徹底して行ったが
それは「音楽の本質をきわめる探求でもあった」

グールドの演奏は「「存在しないもの」、
音楽と呼ばれる「非実体的なもの」を奏でていた」

「「垂直的次元」のみならず「水平的次元」が揃って初めて、
物体的なムシカ・インストゥルメンターリスは
非物体的なムシカ・ムンダーナという
出来事の効果として見出される。
そして、二つの次元が「噛み合う」ことができるのは
対位法を用いて書かれたポリフォニー音楽であり、
それはアーティキュレーションに優れた
ピアノでこそ十全に演奏されうる」

つまり「水平軸の「結合」をみずからの効果として現れさせる
垂直軸の「連合」を見出させることを可能にする」のである

グールドの《ゴルトベルク変奏曲》の再録音はそのように
音楽の潜在的な次元を表現するためでもあったといえる

さて本書はエピローグにおいて
「アントナン・アルトーの足跡をたどるラブソディ」
となっていく

ここでいうラブソディとは音楽の狂詩曲の意味を超え
「無秩序な混乱した表現が、
それでも確かに音楽であるような状態」を意味している



- 互盛央『連合の系譜』（作品社 2024/5）
- 宇野邦一「互盛央『連合の系譜』を読む」（週刊読書人 2024/6/28）
- ティム・ページ編（野水瑞穂訳）『グレン・グールド 著作集1』（みすず書房 2003/12 第7刷）
- A・アルトー（宇野邦一訳）『タウラマラ』（河出文庫 2017/6）

アルトーといえば「器官なき身体」だが
それは「人間を
あらゆる「オートマティスム」から「救い出し」、
「本当の自由」に戻す——そこにある自由とは、
「無限」としての連合の自由であり、
プネウマのラブソディの自由であるはずだった」という

本書『連合の系譜』は
見失われた「プネウマ」（精神）の「連合」を
再発見する長き旅として読むことができるが
その旅のエンディングは終わりなきラブソディである

ラブソディは「無秩序な混乱した表現」のまま
行方を見失いがちだが
わたしたちは「それでも確かに音楽であるような状態」を
潜在的な次元における「連合」として
見出していく旅を続けなければならない…

少し前 (mediopos3574/2024.9.1)に
『ユリイカ』 2024年9月号「石」の特集を
とりあげたことがあるが

Web「WORKSIGHT」に
「あの人は、今日も石を拾っている：
「石の人」氏と考える、現代の石カルチャー」
という記事が掲載されている (2024/10/1付)

「いま石への人びとの注目が、
にわかに高まっているようだ」という

上記の『ユリイカ』での特集のほかにも
映画「石がある」も公開されているので
関心をもつ方もそれなりにふえているのだろう

Webの「note」に「石の人」という名で
「石ころ」を日々紹介しているページがあるので
それが「WORKSIGHT」の記事で
インタビューを受けている方ようだ

「石の人」はデザインのアートディレクター兼デザイナーで
休日の旅行や出張のついでに拾ったりもするという

石拾いをはじめたのは
会社のひとが静岡の御前崎で拾った石を
会社にもってきていたことがきっかけで
その後しだいに石の世界にはまっていき
日本海を中心にいろいろな場所に拾いに行くようになる

石拾いが注目されるようになってるのは
「人知れずみんな個人で石拾いをやっていたのが、
SNS上で可視化されるように」なったことで
「小さなブームのようなもの」になってきているからだろうが

「石が好き」といっても
「石をどう楽しむかという点で、大きくジャンル分けできる」

自然芸術として石を鑑賞する
床の間に飾られているような「水石」が好きな方
主に収集目的の鉱物好きの方
そして「石の人」のような「ただの石ころ拾い」

「石の人」は
とくに地質などの科学的な見方はしないまま拾っているが
拾っているうちに感覚が変わってきて
「このあたりにはこういうものが多いとか、
これはよく拾っているからとか、
自分の「いい石」のかたちが徐々に」できてきている

しかしそんななかで
「いったい自分は何をしてるんだろう」
と思うこともたまにあるという

石拾いの魅力について聞かれることもよくあり

「石拾いの旅そのものやスポット探し自体が面白いとか、
海岸で石を選びながら拾い、
その石を人と見せ合っているのが楽しい」

「もち帰って一個のオブジェクトとして眺め直したり、
写真で表現したりするのも楽しい」と答えたりもするが

「石拾いの行為自体のほうが重要なので、
写真の撮影と発信をしていなかったら、
むしろもち帰らなくてもいいくらいに思ってい」て

「海にとってはどちらかというと
もち帰らないほうがいいわけなので、
もって帰るときも可能な限り厳選して、
あとは戻すようにしてい」るのだという

インタビューの最後にはこう語っている

「自分のなかでは、どちらかというと
普段の思考の箍（たが）を外しに
石拾いに行っているところがあるので
「生きているだけで、目的と成果が求められる」現代社会において
「石ころを拾っているときは、
ただその行為や対象自体に没頭できているのかもしれない。」

「石の人」の石ころ拾いについて
インタビュアーはこんな感想を語っている

あの人は、今日も石を拾っている

「石の人」氏と考える、現代の石カルチャー



■「あの人は、今日も石を拾っている：
「石の人」氏と考える、現代の石カルチャー」
(WORKSIGHT OCT 01, 2024 / interview and text by Saki Kudo)

「雑駁な宇宙の欠片をささやかに拾い上げる試みは、
人間を含むあらゆるものが
競争的な価値のテーブルに並べられ、
目標達成とそれによる成長を迫られる世界への
抵抗にもなりうる。
そのきっかけは、必ずしも鉱山地帯や海底ではなく、
近所の川べりや旅先の浜、
あるいは街中に転がる石たちのなか
に見つけることができるかもしれない。」

目的や結果や効果
ひとの評価など気にしないで
「ただその行為や対象自体に没頭」できる
そんな「石ころ拾い」のような行為が
現代では見失われてしまっているのだろう

知ることさえ
知ることそのものの喜びからではなく
愛することさえ
愛することそのものの喜びからではなく
じぶんの魂を磨り減らすばかりになっていってしまうように

松浦寿輝の『文学界』での連載「遊歩遊心」で
「中島、カフカ、芥川」について書かれている

中島敦はカフカを訳しその影響を受けているが
芥川龍之介にカフカの「痕跡」はない

それは芥川龍之介が「一九世紀のパラダイムの内部で
動いている文学でしかない」のに対して
中島敦は「二〇世紀文学である」ということでもある

二〇世紀文学は
「世界の輪郭や秩序が自明のものではなくなり、
人間の生が何によっても根拠づけられなくなった
―――そんな認識とともに始動」する

中島敦の「二〇世紀的感性」を典型的に表しているのは
「文字渦」や「悟浄出世」である
その感性はホフマンスタールの「チャンドス卿の手紙」や
ボルヘスの短篇群と共鳴しあうものだ
ここではふれられていないが
哲学でいえばサルトルの『嘔吐』などもそれにあたるだろう

文学的表現についてではないが
このテーマの哲学的視点については
古田徹也『言葉の魂の哲学』が
比較的わかりやすく論じているので
それをガイドに中島の「文字渦」「悟浄出世」における
「ゲシュタルト崩壊」について簡単に見ておくことにしたい

「ゲシュタルト崩壊」とは
これはおそらくだれでも体験していることだと思われるが
たとえば「ひとつの文字をずっと見つめていると、
それまで一定の意味と音をもっていたはずなのに、
突然、いわばかたちをなくし、
単なる無意味な線の集まりにしか見えなくなる」
といった現象である

「文字のゲシュタルト崩壊を体験するとき、
人は、意味が引き剥がされた単なる線の集合、
生命のない無機質な存在ともいうべきものを垣間見る。
意味なく、何の必然性もなく、
ただそれがそこにあるという感覚に襲われる。」

「しかし、幸い、通常はこの種の感覚はすぐに消え」
文字はすぐに再び生命を得て、その文字固有の意味を取り戻す。」

中島敦は「ゲシュタルト崩壊」から回復できず
「言葉が死物と化す悪夢を描」き（「文字渦」）
観世音菩薩の導きでそこからの救済を得る話を語る
（「悟浄出世」）

とはいえ「当たり前と思っていたものが
異質なものに感じられる感覚に襲われ、
当然視していた日常の世界が崩壊する事態に直面」した
「悟浄出世」の主人公である沙悟浄は
その後も「どうも、うまく納得が行かぬ」というように
「意味への問いを完全に忘れられたわけではない」

中島敦は三十三歳で亡くなっているので
その後に書かれたかもしれない物語を
読むことはできないのだが
そこでは「無意味性」に満ちた禅の言語が
テーマとなっていたかもしれない

「ゲシュタルト崩壊」は
それまで意味を作り出していた分節が
その自明性を失った状態だといえるが
ある意味そこから出発するのが禅の言語だともいえる

「言語はもともと無限定的な存在を
様々に限定してものを作り出し、ものを固定化する。
ここで固定化とは言語的意味の実体化にほかならない。」
（井筒俊彦「禅における言語的意味の問題」（『意識と本質』）

「意味作用が働いている限り」
「個々の語は現実のある一断片を切り出して
これを固定的に結晶させざるを得ない」のである
つまり分節化することで意味を固定化させる

従って「ゲシュタルト崩壊」では
「意味作用を失った瞬間に言語記号は
記号としての生命を失って死物と化す」だけだが

禅は固定化を嫌い「一切のものを本来無自性」だと見る
その言語は「絶対無分節」「絶対無意味」にありながら
言語的に分節された存在の次元との間で
一瞬閃くようにその「言語の有意味性が成立する」

いうまでもなくその「言語の有意味性」は
すでに分節化され固定化された自明な意味ではない



- 松浦寿輝「遊歩遊心」連載62回「中島、カフカ、芥川」（文学界 2024年11月号）
- 『中島敦』（ちくま日本文学全集 1992/7）
- ホフマンスタール（桧山哲彦訳）『チャンドス卿の手紙 他十篇』（岩波文庫 1991/1）
- 古田徹也『言葉の魂の哲学』（講談社選書メチエ 2018/4）
- 井筒俊彦『意識と本質』（岩波書店 1983/1）

前回（昨日）はそれまで意味を作り出していた分節がその自明性を失った「ゲシュタルト崩壊」とそこから出発する禅の言語についてとりあげた

「言語はもともと無限定的な存在を様々に限定してものを作り出し、ものを固定化する」つまり「意味の実体化」を行うものでその意味作用を失えば言語は「死物と化す」・・・

今回はそれとは対照的に「意味の実体化」を積極的に行うともいえる文章を書く技術に関する本千早耿一郎『悪文の構造』をとりあげる

副題に「機能的な文章とは」とあるが解説（石黒圭「「悪文」に名著が多い理由」）にもあるように本書の目的は「センテンスを書いたとき、その構造が一つの意味でしか解釈できないように、頑強に書くこと」であり「逆から見れば、一義的に解釈できる頑強な文を書くうえで必要な条件を残らず挙げて論じ」られている

「一文一義」に文章の機能美を見出しているのである

「悪文の構造」という題の「悪文」とはそれに反するあらゆる要素である

著者は言葉には「事実や意思を伝達する働き」と「感情を表す働き。あるいは、相手の感性に訴える働き」があり「ほとんどすべての言葉は————ゆえにほとんどすべての文章は————これら二つの働きを合わせ持つ」という

文書を読んでいて「分かる」というのは「書かれている事実が分かる」という「伝達の働き」が機能し「作者の意図したことが分かる」という主に「感化の働き」が「伝達」のほかに機能しなければならないが

さらには「文学作品などを真に理解する」ためには「作者の意図しなかったもの——だが潜在意識において意図したもの——」が「分かる」必要がある

本書ではこうした意識的か無意識的かにかかわらず「文学作品」に隠された意図をいかに「分かる」かについては特に論じられてはいない

論じられているのはあくまでも「文章の機能美」である

「洗練された、機能的な文章とは、なにか。わたくしは、ここで工学の理論を応用したいと思う」と述べられてもいるように

長文を避けることや結論を先に述べること必要な主語を省略しないことや接続詞を濫用しないことそしてやさしい言葉を使うことなど主に「伝達の働き」を有効にし「悪文」を避けるための文書作成術である

読みすすめていくとじぶんがいかに「悪文」ばかりを書いているか反省させられることしきりで「伝達」を目的とする文章を書く際にはずいぶんと参考になり基本的な文章作成術としては必須だろうが

「伝達」を目的とせずどちらかといえば「意味の実体化」を可能な限りすり抜けていきたいときには別の観点での言語機能へのアプローチに惹かれる

それはある意味では「悪文」でさえなく「非文」「脱文」とでもいえるかもしれないのだが・・・



■千早耿一郎『悪文の構造——機能的な文章とは』（ちくま学芸文庫 2024/10）

田中達也はミニチュア写真家・見立て作家である

「2011年、ミニチュアの視点で日常にある物を別の物に見立てたアート「MINIATURE CALENDAR」を開始。以後毎日作品をインターネット上で発表し続けている」

「見立て」とは
「対象を他のものにたとえる、なぞらえること」であり
「見て、いいものを選びきめること」である

「見立て」を意識することで
「日常をいつもと違った新鮮な視点で見ることができ」
「今あるものを組み合わせて、新しい価値をつくり出せ」
「人に共感してもらえるアイデアを生み出せる」ようになり

「なんとなくの感覚」ではなく
「アイデアを論理的に導く」ことができるようになる

田中達也は本書『みたてのくみたて』で
実際に作られてきた「ミニチュア」アートを紹介しながら

「形」から発想する
「色」から発想する
「暮らし」から発想する
「スケール」を変える
「動き」から発想する
「擬人化」する
「世界共通の出来事」から発想する」

という「見立て」の発想を教えてくれる

たとえば「形から発想する」とは
「山は「△」、ビルは「□」、太陽は「○」、さらに家は「△+□」」というように世の中にあるものの形を「簡略化」してアイデアに結びつけること

田中達也は「写真家」であるということもあり実際に「ミニチュア」を制作するための見える／見せるための「見立て」として発想しているが

こうした「見立て」は
いうまでもなく見えないものを発想するときこそ有効になる

物理学でよく使われるような
「思考実験」もある意味で
「見立て」のひとつだろうし

さらには物理的にも論理的にも感覚的にも具体的に概念化し難いものについてもなにかに「たとえ」「なぞらえ」ることで「見立て」を「組み立て」
それまでに存在し得なかった世界像を描くことが可能になることもあるのではないだろうか



mediopos-1948(2020.3.16.)でとりあげた
『世界は贈与でできている』の著者・近内悠太の連載
「あたらしい比喻をつくるように」が
Webサイト「晶文社スクラップブック」で始まっている

その第一回目は「比喻という弱い言葉」

ー昨日とりあげたmediopos3619(2024.10.16.)
千早耿一郎『悪文の構造』では
「一文一義」に文章の機能美を見出す
いわば「工学の理論」の応用による文章作成が説かれていたが

ここでは五感でとらえることのできるような
一義的な意味に固定されることのない
「比喻」「メタファー」による「世界把握の方法」が論じられる

「比喻」「メタファー」は
「言語表現の単なる「飾り」ではなく、極めて人間的なもの」で
「人間にしか操ることのできない「世界把握の方法」」である

ちなみにメタファーとは「隠喩」と訳されているように
比喻であることを明示しない比喻の一種

ここでは「硬い」という言葉がとりあげられている

「字義通りの意味での「硬い」」は、
動物でも認識できるような物理的性質だが

「頭が硬い」
というときの「硬い」は
頭蓋骨の難さとは関係のない
抽象的な硬さを表すメタファーである

「頭が硬い」に対し「頭が柔らかい」というのは
「状況対応が上手い、下手ということ」を表し
硬さや柔らかさという言葉が
「物理的性質から転じて生み出されたメタファー」
として使われている

「甘い歌声」といった
「味覚と聴覚が混線した表現、つまり共感覚的な表現」にしても

「そこには抽象の世界、言ってみればイメージの世界が開かれ」
日常的に使われるメタファー表現として使われているように
わたしたちは「メタファーの領域、
つまりイメージの世界を生きてい」て

「目に見えないものを言語使用に織り込ませて、
しかもそれを他者と共有することができる」のである

「なぜメタファーにそのような力がある」のかといえ
「メタファーは「弱さ」を有しているから」である

弱さというのは
「一つには、メタファーは一義的でない、ということ」であり
そのことによって
「メタファーが担う意味は受取手に開かれている」

わたしたちがなぜメタファーを使用するのかといえ
「それは、一義的な意味ではなく、
その表現が担う「イメージ」を伝えたいから」であり

メタファーを使うことで
「イメージそれ自体を、意味を経由することなく、
ダイレクトに表現」できる

メタファーは一義的な意味の共有ではなく
「イメージやモチーフの伝播であるならば、
そのメッセージは話者の所有物ではない」

したがってメッセージが
「一義的な意味を有した瞬間、
メタファーはメタファーとしての死を迎える」

メタファーが死ぬのは
「多義的な色彩を失い、
その語の「使用法」が固定される」ときである

近内悠太はここで
宗教学者ミルチャ・エリアーデの言葉を引いている

「イメージはその構造上「多価的」なのである。
もし精神がイメージを用いて
事象の究極の实在を把握するとすれば、
それはまさしくその实在が矛盾した仕方で顕現するからであり、
したがって諸々の概念によっては表現されえないからである。」

そこで示唆されているように
「イメージ（それゆえ比喻）のもう一つの性質」は
「矛盾」である

わたしたちは
「明示的な言葉（＝概念、論理）」では表現できないとき
イメージつまりメタファーを使う

「理性や論理、計算的思考が活躍する」ところでは
「強い言葉」が使われるが
「そのようなスマートで鋭い言葉」では
わたしたちの「こころ」は語れない

必要なのは
「要約できない言葉、他の言葉では言い換えられない言葉、
情報に変換できない言葉ではないか」



第1回 比喻という弱い言葉

投稿日: 2024-10-05

■近内悠太「あたらしい比喻をつくるように」
～第1回 比喻という弱い言葉～
(晶文社スクラップブック 2024-10-05)

「多義的で矛盾した言葉、
すなわち弱い言葉を語ること初めて」
「同じイメージを、それぞれ異なった仕方で共有」し
「こころ」を表現できるのである

連載第一回目の終わりには
オードリー・タンがしばしば引用する詩
レナード・コーエンの「Anthem」が引用されている

There is a crack in everything
(すべてのものにはヒビがある)
That's how the light gets in
(光はそこから入るのだ)

「この言葉は、論理の彼岸にある」

「論理は矛盾を許容しない」が
「メタファーは矛盾しているからこそ言語として機能する」

一義性に縛られた表現のなかだけでは生きていけない
その「ヒビ」から入ってくる「光」としてのメタファーは
わたしたちを「論理の彼岸」に連れ出してくれる

DISTANCE mediaの

「F6 記憶のケア」の「F6-6」に
桑木野幸司「庭をつくるように、記憶を育む」
「前篇・後編」が掲載されている（2024/10/18）

桑木野幸司『記憶術全史／ムネモシュネの饗宴』は
mediopos-1494（2018.12.18）及び
mediopos-3210（2023.9.1）でとりあげているが
今回の記事はそれに関連した内容となっている

プラトンの『パイドロス』には
「文字で出来た庭」という比喩が語られている

そこには
「文字（書き言葉）には対話能力が欠けているから、
文筆などしょせん遊びにすぎ」ないという
半ば否定的なニュアンスがありはするのだが

「文字で出来た庭」には
「記憶のリザーブとしての文字（の庭）」という、
メディアの問題（文字＝庭＝記憶）」と
「言語による魂の成長を園芸と重ねる、
教育哲学的な視点（魂＝庭）」
という二つの重要な観点が凝縮されている

「加えて、プラトンの思想を継承した西欧哲学の伝統では、
心／魂（animus）は、しばしば記憶と同一視された」
ことから考えれば
「文字＝庭＝魂（心）＝記憶」ともいえる

そして魂や記憶が「庭」に類比されるならば
その「庭」には「メンテナンスが不可欠」であり
「入念な手入れとケアによって、人の内面は涵養され、
豊かな記憶が育ってゆく」場所ともなる

西欧には古来から
そのための「記憶術」というメソッドが存在した

それは古代ギリシア・ローマの弁論術に起源をもち
以下の基本原理をもっている

1. 情報の器となる建築・空間を心の中に設定する
（この器のことを「ロクス」と呼ぶ）
2. 憶えたい情報をイメージ群に変換する
3. それらのイメージを先の仮想建築の中に順番に配置する
4. 思い出したいときに心の中の空間を巡回し、
配置画像からお目当ての情報を取り出してゆく。
5. データが不要になったら、イメージのみ消去して、
建築の器は再利用する

こうした記憶術は中世には下火になったが
西欧のルネサンス期に復活し大流行する

ルネサンス期の人々は当時においてもすでに
「知的化石」ともなっていた記憶術を
「膨大な蔵書を丸ごと頭にしまいこむ」
「記憶の図書館」の構築のために活用した

基本は上記の基本原則と同じだが
「学問分野別に分かれたロクスの中に、
書物から学んだことをイメージ化して、配置してゆく」

しかし「記憶術を用いて作りあげた「記憶の庭」」には
「日々のケア／メンテナンスを欠くことができない」
「記憶は世話するほど育つが、
放っておけばたちまち衰退する」からである

重要なのは「常に学習意欲を保って己の力で思考し、
獲得した知識を丹念に育てること」である

さらには「記憶の庭の秩序を保ち、
健全な情報の育成を守るため」の「忘却術」も必要となる

「時間の経過とともにイメージが
ロクスから消えてゆくの待つ」だけではなく
「ロクス上から消去しようとしても、容易に消せない」ときは
「積極的な措置」も必要となる

そんな面倒極まりないともいえる「記憶術」が
ルネサンス時代に流行したのは
それが「場所とイメージの組み合わせという
認知科学的に有効な手法に加えて、
記憶データのケアをも有機的に組み込んだ
システムであった」ため
魂＝庭の成長に効果的であったからではないかと
桑木野氏は述べている

こうした記憶術は
現代の読書や情報摂取とは
ずいぶんその様態を異にしているが
わたしたちはだれでも生得の能力として
心の中に「奇跡の庭園」をもっているという

そして現代においても
「自分にとって意味のある情報を選び、
それを徹底的に咀嚼しつづけ」
「庭をつくるように、記憶を育」んでいくことが
重要なのではないかというのである



- DISTANCE media（F6 記憶のケア）
F6-6 桑木野幸司
「庭をつくるように、記憶を育む」
記憶のデザインとメンテナンス
F6-6-1（前篇）／F6-6-2（後篇）2024/10/18
■桑木野幸司『記憶術全史／ムネモシュネの饗宴』
（講談社選書メチエ 2018.12）

個人的なことになるが
正直なところ単純記憶を苦手とし
忘れるのを得意としている

記憶の庭の一次的な容量はきわめて小さく
そのためある程度の秩序は保たれているが
決して大庭園などにはなりようがなく
あたまのなかはいつもからっぽに近い

できるのは関心のあるテーマについての考え方を
ある種のまとまりとして植えて育てることくらいだ
そしてその小さな庭に植えたひとつひとつを
考えるたびごとに展開させ
二次的な形に成長させていく感じだろうか
そして用が済んだらまたあたまをからっぽにする（忘れる）

そんな魂＝庭でも
おそろくなんとなかってきているようなので
そのスタイルはたぶん変わらないだろうと思っている

議論するのは好きになれない

議論による試合であるディベート
比較的最近はやりの「論破」といった
エンターテインメント的な議論など
自己目的化した議論さえある

勝ち負けをつけて
なにがうれしいのか

けれど議論で言い負かすことに
喜びを感じるような
そんなメンタリティーをもった人に
対せざるをえないときには
護「心」術としての議論術も必要になる

そんなとき
「言葉で自分の心を守るだけの議論術を
身につけていただくために書かれた本」である
香西秀信『レトリックと詭弁 ―禁断の議論術講座』が
少なからず役に立ちそうだと
たしかに「隠れた名著」である

著者はこうしたレトリックを研究することで
「それが機能する楽屋裏を暴露すること」になり
「レトリックに長けた人間は仕事がやりづらくなる」という

できれば不毛で不快なディベートやら論破やらが
なくなるようになればと願う

本書は全五章で構成され
全十七話それぞれの章ごとに
古今東西の文学作品などから
面白い議論術や詭弁・強弁の実例が挙げられ
それを分析することで楽しい「議論術」が展開されている

各話冒頭にとっても面白い具体例があるので
それぞれの例と典拠そしてその論点についてとりあげる
(例ごとのポイントについては各話ごとの引用部分を参照)

第一章「議論を制する「問いの技術」」は
以下の第一話から第四話まで

第一話 赤シャツの冷笑(夏目漱石『坊っちゃん』)
→問いの効果
「あなたの仰やる通りだと、下宿屋の婆さんの云う事は信ずるが、
教頭の云う事は信じないと云う様に聞えるが、
そう云う意味に解釈して差支ないでしょうか」

第二話 カンニング学生の開き直り(『現代大学白書』)
→「問い」の打ち破り方
「他にもやっている人がある。要領よくやっているのが得をして、
たまたま見つかったものが損をするのですか」

第三話 北山修の後知恵(『さすらい人の子守唄』)
→論点の摩り替えその①
「ホット・ドッグ一つで寝ることがいけないのなら、
数百万もするダイヤモンドの結婚指輪をもらって
寝ることはイイことなのか」

第四話 西行の選択肢(上田秋成『雨月物語』)
→二者択一の力
「そも、保元の御謀叛は天の神の教へ給ふことわりにも
違はじとておぼし立たせ給ふか。又みづからの人慾より計策り給ふか」

第二章「なぜ「問い」は効果的なのか？」は
以下の第五話から第七話まで

第五話 村上春樹の啖呵(『村上朝日堂はいかにして鍛えられたか』)
→相手の答えを封じる問い
「ふん、長ズボンはかなくちゃ食えないような立派な料理なのかよ」

第六話 臼淵大尉の鉄拳(吉田満『戦艦大和ノ最期』)
→言質を取るための問い
「貴様はどこにおるんだ、今娑婆にいるのか」

第七話 福田恆存の雪隠詰(「当用憲法論」)
→相手に沈黙を強いる問い
「では、あなたは天皇をあなた方の象徴と考へるか、
さういふ風に行動するか」

第三章「相手を操る弁論術」は
以下の第八話から第十話まで

第八話 ナポレオンの恫喝(ジョージ・オーウェル『動物農場』)
→多問の虚偽と不当予断の問い
「諸君の中で、ジョーンズに帰ってきてほしいなどと
願っているものは、ひとりもないだろう、ええ？」

第九話 丸山眞男の対照法(『増補版 現代政治の思想と行動』)
→選択肢の詐術
「私自身の選択についていうならば、大日本帝国の『实在』よりも
戦後民主主義の『虚妄』の方に賭ける」

第十話 鳴海仙吉のディレンマ(伊藤整『鳴海仙吉』)
→ディレンマの活用
「もし君がオリジナルなものを書いているなら、君の年齢でそれは
自分に分らずにいることができないから、師匠はいらない。
もし君が二十三歳になって既成の他人のマナリズムを
くりかえしているのなら、君は師匠を持っても、意味がない」

第四章「「論証」を極める」は
以下の第十一話から第十三話まで

第十一話 プラトンの不安(プラトン『国家』)
→論争における「根拠」
「君は気がついていないかね？
現在この問答の技術による哲学的議論には、
どれほど大きな害毒がまつわりついているかということに」

第十二話 夏目漱石の摩り替え(『硝子戸の中』)
→論点の摩り替えその②
「じゃ小説を作れば、自然柔道も旨くなるかい」

第十三話 芥川龍之介の「魔術」
→相手をはめる
「そこで僕が思うには、この金貨を元手にして、
君が僕たちと骨牌をするのだ」

第五章「議論を有利にするテクニク」は
以下の第十四話から第十七話

第十四話 清水幾太郎の喧嘩(「或るドイツ人の思い出」)
→《tu quoque》の技術
(《tu quoque》とは「おまえも同じではないか」)
「あなたは、那須の日本風の旅館で、日本の作法を守ったであろうか」

第十五話 丘浅次郎の後出し(駒井卓「自由人丘浅次郎先生」)
→発言の順番
「その後は教育学や教授法の先生方が流行に従つて、
ヘルバルト塗りにでも何塗りにでもご随意に上塗りをしてくれたらよい」

第十六話 兼好の嘘(吉田兼好『徒然草』)
→嘘のつき方
「げにげにしく所々うちおぼめき、よく知らぬよしして、
さりながら、つまづま合はせて語る虚言は、恐しき事なり」

第十七話 イワン・カラマーゾフの辞退
(ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』)
→具体例を限定する
「僕はなにも神を認めないというんじゃないよ、いいかい、
アリョーシャ、ただその入場券を神様に謹んでお返しするだけの話さ」

最後に第十二話において詭弁対する注意として
ヴィルフリート・ハルティヒが
現代ドイツの代表的なレトリックの教科書の中で
戒めている言葉を挙げておきたい

「言葉は汚れた壁を隠す壁紙のように使われるのではない」
「あらゆる議論や交渉事で、
常に自らを「勝者」にしなければならないと考えている者は、
誤ったことを教わってきたか、
あるいは単に————馬鹿(dumm)————なのだ」

勝ち負けのための議論が
いかに不毛で「馬鹿」なのか
そのことだけは心しておきたい



■香西秀信『レトリックと詭弁 ―禁断の議論術講座』
(ちくま文庫 第14刷 2024/10)

オープンダイアログについては

mediopos2732 (2022.5.11) で
石原 孝二・斎藤 環 編
『オープンダイアログ 思想と哲学』を

そして最近ではそれとも少なからず関係している
村澤和多里・村澤真保呂
『異界の歩き方―ガタリ・中井久夫・当事者研究』を
mediopos3585(2024.9.12)/mediopos3593(2024.9.20)
mediopos3595(2024.9.22)でとりあげている

今回とりあげる斎藤環『イルカと否定神学
―対話ごときでなぜ回復が起こるのか』は

著者じしんがオープンダイアログにかかわりながら
なぜ対話するだけで回復していくのか
「対話とは何か、人が変わるとはどういうことか、
そして「回復」にはいったい、どんな意味があるのか」と
いう哲学的な疑問に対し

ラカン・ベイトソン・バフチン・レイコフ
中井久夫などの思想を駆使しながら
そこに新たに「否定神学」を加えることで
その問いに答えようとした試みとして深く感動的でさえある

ただタイトルにある「イルカ」については
ベイトソンの学習理論をとりあげる際にでてくるだけなので
キャッチャーなやわらかい言葉をタイトルに加えることで
注目されることをねらったのだろう

内容からすれば「イルカ」に代えて
「オープンダイアログと否定神学」
とするのが妥当ではないかと思われる

さてオープンダイアログは
「ケア」や「回復」の過程において
「治療者の意図や操作、つまり能動性は、
しばしば阻害要因になる」ということから
「意図や操作の要素を排して、患者の自発性を最大限尊重し、
「偶然」というリソースをめいっぱい活用する」ための
対話実践として開発されたものだが
斎藤氏はそれを
「もっとも洗練されたアプローチだと確信」しているという

本書で論じられ
斎藤氏がそのキーワードのひとつとしているのが
タイトルにもある「否定神学」である

否定神学とは神を論ずる際に
「神は～でない」と神を否定形で語るものだが

神を論ずる場合のように
「人間は、いちばん言いたいことは言わない。
あるいは、言えない。」というもので
「とりわけフロイトからラカンに至る系譜は、
徹底してこの方向性を極めた理論」だという

「心」そのものがまさに
そうした否定神学的な構造を持っていて
間接的・隠喩的にしか語れないということでもある

本書ではそうした否定神学的な
ラカンの視点を批判的にとりいれながら
オープンダイアログを
クライアントと治療者の「無意識を活用した協働作業」として
精神分析と対話実践を架橋するものとして位置づけている

そのオープンダイアログにおける
重要な原理の一つが「ポリフォニー」（多声性）

そこで重要なのは「余白」である

モノフォニーやハーモニーには余白がなく
「異質な音が鳴れば」ノイズになってしまうが
ポリフォニーには「どんなミスタッチとも共存可能な余白」があり
「こうした余白があって初めて、
個人は主体的に振る舞うことが可能になる」のだという

斎藤氏はオープンダイアログにおいて生じていることについて
ベイトソンの学習理論をガイドとしながら示唆を加えている

ベイトソンは学習を「ゼロ学習」「学習Ⅰ」「学習Ⅱ」
「学習Ⅲ」「学習Ⅳ」に分類している

ゼロ学習は試行錯誤などで修正されることのない
単なる行為における学習であり

学習Ⅰはパブロフ条件づけのような普通見られる学習

学習Ⅲは学習Ⅰが繰り返されることで
同時に「学習のコンテキスト」も学習し
「再帰的に維持されやすい」ものとなっている学習

そして学習Ⅲは「学習と逆学習を通じて、
学習Ⅱの起こり方を自在に調節できる状態」

学習Ⅳはさらにそれをこえた
いわばS F 的な進化における学習としている

そのベイトソンの学習理論に沿っていえば
統合失調症の回復のためには
学習Ⅱから学習Ⅲへと移行しなければならない

回復が妨げられるのは
「病のコンテキストが固定化」されてしまうことなので
それを「回復」に導くためには
「生じてしまったコンテキストを壊したり、
新たなコンテキストを立ち上げたりする必要」がある

「その作用をもたらす最大の要素が、言語であり対話」だが
「その介入は、意図的、操作的になされうるもの」ではなく
「議論や説得のような方向性を持たず、
ただ固まったコンテキストをときほぐす、
あるいは破壊するような対話」が必要とされる



■斎藤環
『イルカと否定神学―対話ごときでなぜ回復が起こるのか』
(医学書院 シリーズ ケアをひらく2024/10)

言語とコンテキストとは基盤を共有していて
コンテキストは「学習Ⅲによって定着し強化される場合、
必ず「身体化」され」る

しかも人間の言語は
原則として一つの意味しか持ちえない記号ではなく
多義的な意味を可能にする隠喩としての働きをもつが
その基盤には「身体」があって
それは「思考全般の土台」ともなっている

「言語のみではコンテキストに呑み込まれ」かねないが
「対話にはポリフォニーという重要な機能があり、
それが言語の作用に強力なブーストをかけてくれる」

ポリフォニーは
声を重ね響き合わせるという「多声性」をもち
身体性において多様な「余白」を
浮かびあがらせることができるのである

オープンダイアログでは
「目的」や「ゴール」をもたないまま
「対話の継続」が目指され
そのことで治癒や改善へとつながっていくが
そのダイアログにおいて
そうしたポリフォニーの「余白」があることで
「個人は主体的に振る舞うことが可能になる」のである

たかが対話
されど対話

魔法のようなオープンダイアログの秘密について
なにがしかの示唆を得ることができたようにも思えるが
人間と心と言葉と対話
ますます謎が深まっていくようでもある
否定神学の如く肝心なことは語り得ないようなそんな・・

一昨日金森慧「Origami/折紙」という
正方形の紙が様々な折り紙の生き物に折られていく
その様子を描いた映像作品をみたのだが

その映像から
いまこのある世界そのものが
潜在的なエネルギーを持った「意味の深み」から
創造されてきたイメージを象徴しているかのように
感じられたこともあり

今回は「意味」とは何か
「意味」はどこから生まれるのかについて
みていくことにしたい

「レンマ」をテーマ化した最初の哲学者である
山内得立『意味の形而上学』は
「意味とは何であるかを研究せんとする学問」として
「意味の形而上学」を論じた
(mediopos2713/2022.4.21でとりあげている)

「事物は意味なしには実存することができない、
単に存在はしても実存するとはいえない」からだが
「意味とは何であるか、意味はそれ自らとしてあるか
又は事物の意味としてのみあり得るのであるか」

その問いから山内得立は
「一般に「ある」ことを問題とするものが
形而上学であるとするならば」
「意味の何であるかを問うことは
形而上学でなければならぬ」とし
「我々の形而上学は単なる存在の学でなくして
意味的存在の学である」のだとする

意味とは何であるのか
なぜ意味というものが存在するのか
そうした問いは
なぜ世界があるのか
なぜ私が存在しているのか
そうした問いと
深く照らし合っている問いでもある

その「意味」の「深み」へと向かったのが
井筒俊彦である

若き井筒俊彦は
かつて言語学を講義していたとき
自分で講義しながらも
「従来の言語学が、「意味」という現象を、
いかにも自明の常識的事実として、
こともなげに取り扱っていること」に不満をもっていたが

そうした「意味の深み」について
哲学的理論的に扱い得るのではないかという確信が生まれたのは
ずっと後に仏教の唯識哲学を学び始めた時だという

唯識哲学は個人的経験だけではなく全ての人の経験の深みに
「意味化」のプロセスである「薫習」があると説く

- 井筒俊彦『意味の深みへ／東洋哲学の水位』
(岩波書店 1985/12 文庫2019/3)
- 斎藤慶典『「東洋」哲学の根本問題 あるいは井筒俊彦』
(講談社選書メチエ 2018/2)
- 山内得立『意味の形而上学』（岩波書店 1967/4 1989/11 第五刷）

表層から深層に及んでいる
人間のこころの構造モデルの最深層に
「過去一切の経験が「意味化」して蓄えられる
内的場所（トポス）として」「アラヤ識」があり
そこに「種子（しゅうじ）」として
「意味」が貯蔵されているというのである

井筒俊彦は
「「数限りないこれらの潜在的「意味」形象の全体を理論的に想
定し」
それを「言語アラヤ識」と呼んでいる

そして「我々の存在認識」は
「根源的に、「言語アラヤ識」に依存している」という

「「言語アラヤ識」に蓄えられている
「種子」（潜在的「意味」形象）が、活性化されて、
我々の表層意識の領域に働くからこそ、
我々は、その都度、世界を有「意味」的存在秩序として経験する」

そのことについて
井筒俊彦『意味の深みへ』の解説および
井筒俊彦の「東洋哲学」についての著作を著している
現象学者の斎藤慶典はこう示唆している

「何かが何かとして存在することは、その何かが
当の何かとして現象することと切り離すことができない。」

「このことは、何かが存在するのは必ず
何らかの存在秩序の対してであることを意味する。」

「このような存在秩序がしばしば「神」、
すなわち「絶対者」と呼ばれてきた」
そして「神の前に／に対して世界がそのようなものとして
姿を現したとき、世界は存在するに至った」

空海が説いた「法身」である「大日如来」の「真言」も
「絶対的な存在者「法身」が世界をそのようなものとして分節化
し、
この意味で「コトバ」である（「説法」する）ことを以って
世界が存在するという事態だった。」

しかし「「ある」の直下には、
「ない」の深淵がぱっくり口を開けている」
「思考はこの「ない」について、何かを知ることは出来ない。
思考が捉えうる何ものも、そこには「ない」からだ。」

井筒俊彦の「東洋哲学」は「それ以前」
つまり「端的な「無」」について論じてはいない

井筒俊彦はジャック・デリダと親しく議論を交わしたもしたが
デリダが直面していたであろう
「世界創成の現場で砂漠にいつとき浮かび上がる分節先は
———充滿する「空」に走る亀裂の痕は———、
いったいどこからやって来るのか。」という問いを
問うことはなかったという



斎藤慶典はそのことを示唆しながら
「私たちが生きている世界」としての
「分節化された有意味性から成る
「俗」な次元に立ち戻」ることへと論点を向けている

「私たちが生きている世界は、
この「有意味」で「俗」な世界以外ではないからだ」

「他人たちを含む多種多様な「存在者」から成る世界、
それが私たちの生きてゆく
「俗」界としての「町＝郷（てん）」」なのだ

これは禅の十牛図の「入郷垂手(にってんすいしゅ)」
つまり悟りを得た修行者が街へ出て
別の童子と遊ぶ姿を描いたもの

私たちはじぶんが俗の世界の虚妄と幻影を
生きていることに気づき
存在の源へと還っていかねばならないが
それはいまここを離れるということではない

世界は俗として現象している
そして俗のなかでこそ他者は現れるがゆえに
俗のなかでこそヴェールの外された世界で
目覚めながら生きなければならないということだ

「意味の深み」とは
おそらくメビウスの環のように
「無」と「有」の相即した場所（トポス）のなかでこそ
見出されるのではないだろうか